あなたは柏崎が好きですか？：2014年度実施「かしわざき住みたい度」調査に見る柏崎の子供たちの心の内

江　口　　潜

2016年2月

新潟産業大学経済学部紀要　第46号別刷

BULLETIN OF NIIGATA SANGYO UNIVERSITY
FACULTY OF ECONOMICS

No.46 February 2016

あなたは柏崎が好きですか？：2014 年度実施「かしわざき住みたい度」調査に見る柏崎の子供たちの心の内[1]

江口　潜

Do you like Kashiwazaki ？：Young people's willingness to live in and send their lives in Kashiwazaki-region

Sen EGUCHI

１．はじめに

著者は 2014 年度、柏崎市企画政策課より要請を受け、「かしわざき住みたい度」調査を実施した。それは柏崎市内の全ての小・中学校、高等学校の児童・生徒、および柏崎市内の２つの大学の学生を対象に、柏崎という地に対する愛着の気持ちを多角的に尋ねるアンケート調査であり小・中学校については欠席していた児童・生徒を除いて全数調査、高校については調査の実施時期が大学受験の時期と重なったこともあり高校により回答を得られた学年等にばらつきはあったものの柏崎市内の全ての高校で、また大学についてはいずれの大学もおよそ 50％の学生より回答を得ることができた。そしてそこで得られたデータの分析の結果は報告書にまとめ、2015 年 4 月末に柏崎市に提出をした。ただ、調査が実施され、「記入済み」すなわち「選択肢を鉛筆でマルで囲んだ」アンケート票が集まって来たのは 2015 年 2 月以降であり、また、集まってきたアンケート票の内容を「電算機による集計･分析処理が可能な形」に移し換え、入力し、さらにそれを集計・分析して結果を出す、ということは膨大な作業であり、そのため 2015 年 3 月末日ないしは報告書作成期日である 2015 年 4 月末日までに行うことのできた分析は限られていた。[2] すなわちそこでの分析は「単純集計」にとどまっている。「単純集計」とは要するに「各問に対して全体でどの選択肢にどれくらいの回答が寄せられたか」ということを記述し「全体的には、どうであるか」という内容の記述に留まることがほとんどである。そのためそのような集計結果はアンケートをした対象の「実像」を活き活きと記述し浮かび上がらせてくれているという実感を抱くには至らないことが多い。本調査についての 2014 年度終了時点での報告書（江口（2015）も､そのような「単純集計であるが故の物足りなさ」が感じられるものに留まっていることは想像がつくところである。求められている事は「クロス集計」を行い、何等かの興味深いファクト（目を引く新しい事実）を見つけ出し､示すことである。[3]

そのような事情を踏まえ、アンケートを実施した主体である筆者は今年度すなわち 2015 年度に入ってからも時間的余裕を見つけては 2014 年度に実施したばかりの「かしわざき住みたい度」調査のより詳細なクロス集計分析を行ってきた。そしてそのような分析を行う中で、柏崎市あるいは柏崎市と刈羽村という、いわゆる「柏崎地域」の小・中学生あるいは高校生が、将来的に柏崎地域において生活を送りたいという気持ちや意思があるか

[1]本稿は「かしわざき市民大学」という一般市民を対象とした柏崎市主催の講座の中の 1 回分として 2015 年 11 月 12 日に著者が講演した内容をまとめ、加筆・修正したものである。そのような講演の機会を頂いた柏崎市教育委員会生涯学習課ならびに講演の際の聴衆の皆さんに感謝申し上げる次第である。

[2]調査の対象には小学１・２年生の児童も含まれており（また予算の都合もあり）、そのため調査は「マークシート方式」ではなく「紙もののアンケート用紙を配って、そこで選択肢の中で該当するものに（鉛筆で）マルを書いて答えてもらう」方式で行われた。そのため、それを電算機で集計できる状態に移し換える（データに移し換える）という作業には多大な時間と労力を要することとなった。

どうか、ということについていくつかの興味深い事柄を発見した。本稿はそれを報告するものであり、柏崎という地域が今後、いわゆる「消滅」という事態に向かう可能性を低くするために着目をしておくことが望ましいと感じるに至った幾つかの発見､すなわちファクトを報告するものである。[4]

本稿の構成は以下の通りである。まず第２節で調査の概要を改めて詳述する。次に第３節で「柏崎が好きですか」「大人になったら柏崎に住みたいですか」という「柏崎に対する愛着の気持ち・柏崎愛」を尋ねる問いに対する柏崎市内の小中学生・高校生の反応を記述する。第４節では小学４・５・６年生のデータを使い、お祭りなど「地域の行事」への積極的な参加が地域愛とどのように関連があるかを調べる。第５節で高校生の「将来、柏崎に住むことになると思いますか」という問いへの返答と親など一緒に暮らす大人からの働きかけとの関係を調べる。第６節で結語を述べる。

２．調査の概要と本稿の分析

２．１　柏崎「住みたい度調査」という調査について

今回（2014 年度実施）の「かしわざき住みたい度」調査は、7 年前（2007 年度）に実施された「若者かしわざき住みたい度調査」という調査の続編という位置づけで企画され行われた。以下ではこれら二つの調査をそれぞれの実施年度に応じて 2007 年調査、2014 年調査、と呼ぶことにするが、2007 年調査は当時新潟産業大学大学院の院生で地元出身の若者であった山本康太氏により発案・企画され、柏崎市よりの助成を得て実施されたものである。「住みたい度」という言葉も山本氏によるものである。[5]

2007 年調査は山本氏の熱意もあり「悉皆調査」すなわちすべての児童・生徒を対象として行う調査として企画され実施された。そして実際に 2007 年調査では柏崎地域の全ての小中学校ならびに高等学校、さらには新潟産業大学と新潟工科大学という２つの大学から協力を得て、小中学校についてはほぼ全ての児童･生徒から､高校についても（大学の受験時期を控えている事情への配慮などから、必ずしも全ての生徒ではないけれども）全ての高校の、大多数の生徒からの回答を得ることができた。大学についても同様であった。そしてそのような 2007 年調査の実績を踏まえ、今回の 2014 年度の調査も 2007 年同様「悉皆調査」を行う方向で調査は企画され実施された。その結果、調査に協力を頂いた小中学校ならびに高等学校、さらには大学とその｢実施率｣すなわち実際にどれだけの児童･生徒にアンケートを実施して頂いたか、ということは付録２の表Ａ２に示してあるが、そこでの内訳をまとめるならば今回の 2014 年調査は、小中学校は（アンケートの時に学校を休んでいた児童・生徒を除いて）「全員」、高等学校も（大学受験を控えた高校生への配慮から、実施を一部の生徒に限定することになった高校もあるけれども）柏崎市内にある全ての高等学校で実施をして頂くことができた。もちろん柏崎市内の２つの大学からも協力を頂くことができたことは言うまでもない。

２．２　アンケートの種類と内容

アンケートは今回、すなわち 2014 年調査においては

・「小学１・２・３年生向け」「小学４・５・６年生向け」「中学生向け」「高校生向け」「学の５種類

を作成し、それぞれ該当する学年の児童・生徒に回答をしてもらった。これら５種類のアンケートには、5 種類全てのアンケート票で共通して問われている質問と、学年が上の生徒にのみ尋ねている

[3] 単純集計とクロス集計の違いを大学で行われている、学生による『授業評価アンケート』を例に説明するならば、私が行っているある授業について「この授業はあなたにとって良い授業ですか」という問いに対して受講者全体、すなわち「単位さえもらえれば授業の分かりやすさや内容の濃さなどはほどほどでいいです」という意識の学生と、「これから専門の勉強や研究ということをやろうとしている。そのためのお手本ともいうべき、先人の英知や知識を吸収したい」と思っている学生とが混在している受講者全体を集計して「全体では先生の授業はなかなか良いといわれています」といった結果を報告することが「単純集計」ということである。一方「単位さえもらえれば」と思っている学生群と「これから英知や知識を究めたい」という学生群を分け、それぞれが私の授業をどう思ったか、といった事を明示的に記述することが「クロス集計」をする、ということである。

[4] 今日、日本の地方都市が将来的に「人口減により消滅してしまう」ということの可能性が注目されると共に、実際にそれがまさに今起きつつあり、顕在化しつつあることが日本社会での共通の認識となりつつあるようである。そのような可能性を明示的に指摘し、社会に警鐘を発し認知をさせた代表的な言説は言うまでもなく増田 (2014) であろう。

質問とが含まれている。

5種類すべてのアンケートに共通の質問

小学生１・２・３年生から大学生・社会人に至るまで（文言等は完全には一致していないけれども内容としては）共通になされている質問（と選択肢）は

・属性（性別、学年）[6]

・「祖父または祖母の方は一緒に住んでいますか。」（選択肢：「はい」「いいえ」「一緒に住んでいないが近所に住んでいる」）

・「柏崎は好きですか。」（選択肢：「好き」「どちらかといえば好き」「どちらでもない」「どちらかといえば嫌い」「嫌い」）

・「大人になったら柏崎に住みたいと思いますか。」（選択肢：「思う」「どちらかといえば思う」「わからない」「どちらかといえば思わない」「思わない」）

といったことである。[7]

共通でない質問

また、高校生（のみ）に対しては

・「あなたは高校を卒業したら、引き続き柏崎に住み続けたいですか。」（選択肢：「そうである」「どちらかといえばそうである」「どちらともいえない」「どちらかといえばそうでない」「そうでない」）

といった質問がなされている。また高校生以上には

・「将来あなたは大人になったら柏崎に住む（柏崎に戻ってくる）ことになると思いますか。」（選択肢：「思う」「どちらかといえば思う」「どちらともいえない」「どちらかといえば思わない」「思わない」）

・「一緒に暮らしている人は、将来あなたが大人になったら柏崎に住んでほしい（柏崎に戻ってほしい）と願っていますか。」（選択肢：「すごく願っている」「少し願っている」「わからない」「あまり願っていない」「まったく願っていない」「願っているが周囲の意見は関係ない」）

といった内容の質問もなされている。[8]

２．３　今回の分析

2007年度に山本氏が最初に発案し実施された「住みたい度」調査は「柏崎で育ちつつある若者の郷土を愛する気持ち、柏崎を愛する気持ち」を深く知り、柏崎で育ちつつある「柏崎出身の若者」に「地元」である柏崎を愛し、積極的に柏崎に居住し、柏崎で生活を送るようになってもらいたい、そうなるためには何が必要なのか、ということを知りたいという切なる想いに基づくものであったと著者は理解している。すなわち「住みたい度」調査の目線の先は基本的に「柏崎で育ちつつある、柏崎市内の小・中学生および高校生」にあり、そのため本稿も「2014年という今日、柏崎で育ちつつある小学生・中学生ならびに高校生」が柏崎のことをどのように思っているのか、ということに集中する。[9]

そしてそのような、「柏崎で育ちつつある小学生・中学生・高校生」の柏崎への気持ち、すなわち郷土愛・柏崎愛というものを描き出すべく「クロス集計」を試みる中、今回は

・「祖父または祖母の方は一緒に住んでいますか。」（選択肢：「はい」「いいえ」「一緒に住んでいないが近所に住んでいる」）

という質問に注目をし、この設問を軸に分析を行い、その結果を報告する。この**「祖父または祖母の方は一緒に住んでいますか。」**という質問は、回

[5] 2007年調査の調査報告は山崎・江口・山本（2009a, b）として公刊されている。
[6] 回答した児童・生徒がどの学校の児童・生徒であるか、ということは学校ごとにアンケート票を回収をすることで調査者が把握できるため、質問項目には含めていない。
[7] アンケートの設問と選択肢の詳細は付録１で紹介をしてあるので参照されたい。
[8] アンケートの質問文および選択肢の文言は「高校生向け」のアンケート票と「学生・社会人向け」のアンケート票では若干異なっている。

答を単純集計するだけでも「柏崎の子供たちのうちどれくらいが三世代同居をしているのか」といった社会学的情報が得られるため「住みたい度」調査のようなアンケートでは必ずと言って好いほどにアンケートの中に含まれる、いわば「定番」ともいうべき「ありふれた質問」である。けれども今回この問いが興味深いと考えられる理由は他にある。それは、この問いに対して「祖父または祖母と一緒に住んでいる」または「一緒には住んでいないが近所に住んでいる」と答えた児童・生徒は、祖父母の一方または両方が柏崎市民である可能性が高く、いわゆる「代々、柏崎に住んでいる家庭」の子弟子女である可能性が高いと考えられる一方「いいえ（祖父、祖母のいずれとも同居してない）」と答えた生徒は（もちろん「代々、柏崎に住んでいる家庭」の子弟子女もその中にはいるであろうが）「仕事等の都合で親が柏崎に転入し居住するようになった」という家庭の子供の割合が多いと考えられることである。すなわちこの問いのおかげで児童・生徒を「祖父母の代から柏崎で暮らしています」という文字通りの「柏崎っ子」のグループと、（文字通りの「柏崎っ子」も含まれているかも知れないが）親が仕事の都合などで初めて柏崎に住み始め子育ても柏崎で行っている、というタイプの家庭の子供が多く含まれているグループに分けることが可能になってくるのである。[10]

すると例えば「大人になったら柏崎に住みたいと思いますか」という質問に対して「祖父母と同居していない、親が初めて柏崎で暮らし始めた」という家庭の子供が多いグループから「あまり住みたいとは思わない」といった回答がある程度多く見られたとしてもそれは「ある程度予想される反応」であると同時に「仕方のないこと」と思われるかもしれない。しかしもし「祖父または祖母と一緒に住んでいる」と答えた子供まで、その多くが「大人になった時に柏崎に住みたいとは思わない」と答えているならば、それは「代々、柏崎に住んでいる」という家庭の子供たちすら将来大人になったときに柏崎で生活を送っているイメージを持っておらず、（漠然とかも知れないけれども）むしろ転出することを思い描いたり考えたりしているということであり、柏崎にとっては強い危機感を感じるべき事態ということになってくるであろう。このように**「祖父または祖母の方は一緒に住んでいますか。」（選択肢：「はい」「いいえ」「一緒に住んでいないが近所に住んでいる」）**という問いに注目し、この問いに対する回答として「何を選んだか」で児童・生徒を分けてそれぞれのグループごとに集計をするというクロス集計を行うことは単純集計では浮かび上がってこない「柏崎の子供たちの郷土愛（柏崎愛）や将来に向かっての意識」について一気に切迫感を伴った関心を惹起する。

以下では早速「実際に分析した結果はどうであったのか」ということ、すなわちクロス集計分析の結果を述べることにするが、その際本稿では多くのグラフが図として示されるため、あらかじめ本稿で登場する図について、それが「どのような問いに対する、どのような児童・生徒による回答状況を示すグラフであるか（例えば三世代同居世帯の小学生男子児童の学年別の回答など）」ということを示した一覧表をあらかじめ表１にまとめたので参照されたい。

[9] 学生・社会人についての分析結果は別の稿で報告を致したいと考えている。

[10] この質問項目は、2014 年調査のアンケート票を作成している最中にはこのような利用をすることは全く想定をしておらず、「2007 年調査でも同じような質問はしているのでとりあえず今回も」ということでアンケートに取り入れたものである。ただし 2007 年調査ではこの問いに対する回答の選択肢は「はい」と「いいえ」しかなかった。「一緒には住んでいないが近所にいる」という選択肢は今回（柏崎市企画政策課からの助言により）含めることにしたものである。

表１　本稿の図一覧

図の番号	何という問いに対する	誰の答え
1-1-m	あなたは柏崎が好きですか。	三世代同居家庭の小１～６（学年別）・男子
1-1-f		三世代同居家庭の小１～６（学年別）・女子
1-2-m		祖父母近所にいる小１～６（学年別）・男子
1-2-f		祖父母近所にいる小１～６（学年別）・女子
1-3-m		核家族家庭などの小１～６（学年別）・男子
1-3-f		核家族家庭などの小１～６（学年別）・女子
1-4-m		三世代同居家庭の中１～高３（学年別）・男子
1-4-f		三世代同居家庭の中１～高３（学年別）・女子
1-5-m		祖父母近所にいる中１～高３（学年別）・男子
1-5-f		祖父母近所にいる中１～高３（学年別）・女子
1-6-m		核家族家庭などの中１～高３（学年別）・男子
1-6-f		核家族家庭などの中１～高３（学年別）・女子
2-1-m	大人になったら柏崎に住みたいですか。	三世代同居家庭の小１～６（学年別）・男子
2-1-f		三世代同居家庭の小１～６（学年別）・女子
2-2-m		祖父母近所にいる小１～６（学年別）・男子
2-2-f		祖父母近所にいる小１～６（学年別）・女子
2-3-m		核家族家庭などの小１～６（学年別）・男子
2-3-f		核家族家庭などの小１～６（学年別）・女子
2-4-m		三世代同居家庭の中１～高３（学年別）・男子
2-4-f		三世代同居家庭の中１～高３（学年別）・女子
2-5-m		祖父母近所にいる中１～高３（学年別）・男子
2-5-f		祖父母近所にいる中１～高３（学年別）・女子
2-6-m		核家族家庭などの中１～高３（学年別）・男子
2-6-f		核家族家庭などの中１～高３（学年別）・女子
3-1-m	地域の行事に参加していますか。	小学４・５・６年生（３学年混合）・男子（世帯構成別に３つに分けてそれぞれ）
3-1-f		小学４・５・６年生（３学年混合）・女子（世帯構成別に３つに分けてそれぞれ）
4-1-m	行事参加と「柏崎が好き」のクロス集計	小学４・５・６年生（３学年混合）・男子・世帯構成も混合・行事への参加度に応じて集計
4-1-f		小学４・５・６年生（３学年混合）・女子・世帯構成も混合・行事への参加度に応じて集計
4-2-m	行事参加と「柏崎に住みたい」のクロス集計	小学４・５・６年生（３学年混合）・男子・世帯構成も混合・行事への参加度に応じて集計
4-2-f		小学４・５・６年生（３学年混合）・女子・世帯構成も混合・行事への参加度に応じて集計
5-1-m	将来大人になったら柏崎に住むことになると思いますか。	三世代同居家庭の高１～高３（学年別）・男子
5-1-f		三世代同居家庭の高１～高３（学年別）・女子
5-2-m		祖父母近所にいる高１～高３（学年別）・男子
5-2-f		祖父母近所にいる高１～高３（学年別）・女子
5-3-m		核家族家庭などの高１～高３（学年別）・男子
5-3-f		核家族家庭などの高１～高３（学年別）・女子
6-1-m	親など一緒に暮らしている人はあなたが将来柏崎に住むことを願っていますか。	三世代同居家庭の高１～高３（学年別）・男子
6-1-f		三世代同居家庭の高１～高３（学年別）・女子
6-2-m		祖父母近所にいる高１～高３（学年別）・男子
6-2-f		祖父母近所にいる高１～高３（学年別）・女子
6-3-m		核家族家庭などの高１～高３（学年別）・男子
6-3-f		核家族家庭などの高１～高３（学年別）・女子
7-1-m	親などの「戻ってきて」という期待と「住むことになる」のクロス集計	三世代同居家庭の高１～高３（３学年混合）・男子
7-1-f		三世代同居家庭の高１～高３（３学年混合）・女子
7-2-m		祖父母近所にいる高１～高３（３学年混合）・男子
7-2-f		祖父母近所にいる高１～高３（３学年混合）・女子
7-3-m		核家族家庭などの高１～高３（３学年混合）・男子
7-3-f		核家族家庭などの高１～高３（３学年混合）・女子
8-m	親などの「戻ってきて」という期待と「将来柏崎に住みたい」のクロス集計	三世代同居家庭の高１～高３（３学年混合）・男子
8-f		三世代同居家庭の高１～高３（３学年混合）・女子

３．クロス集計の結果

３．１　あなたは柏崎が好きですか？

すでに述べたように「住みたい度」調査の最大の関心は、柏崎で暮らす児童・生徒の「柏崎を愛する気持ち、柏崎が好きだという気持ち、柏崎で暮らしたいという気持ち」はどのようであるかということ、すなわち「子供たちの柏崎愛」の様相を知りたいということである。そこで、そのような「柏崎愛」を最もストレートに問う

・「あなたは柏崎が好きですか。」（選択肢：「好き」「どちらかといえば好き」「どちらともいえない」「どちらかといえば嫌い」「嫌い」）

という問いに対する子供たちの反応の様子を**「祖父または祖母と一緒に住んでいる」**という児童・生徒、**「一緒に住んでいないが近所に住んでいる」**と答えた児童・生徒、そして「**いいえ**（祖父母とは一緒には住んでいない）」という児童・生徒ごと（さらに男子児童・生徒と女子児童・生徒ごと）に分けて集計をした。その集計結果が以下の図 1-1-mから図 1-6-f までの各図（グラフ）である。

図 1-1-m　柏崎に「祖父母と同居している」という男子児童（小学生）

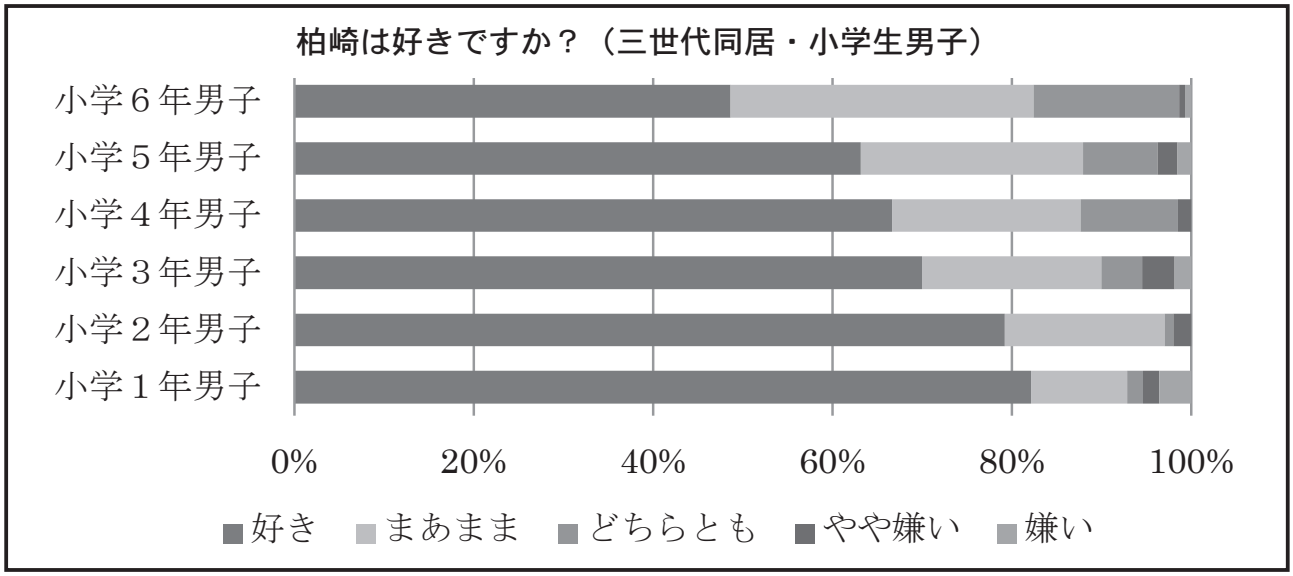


図 1-1-f　柏崎に「祖父母と同居している」という女子児童（小学生）

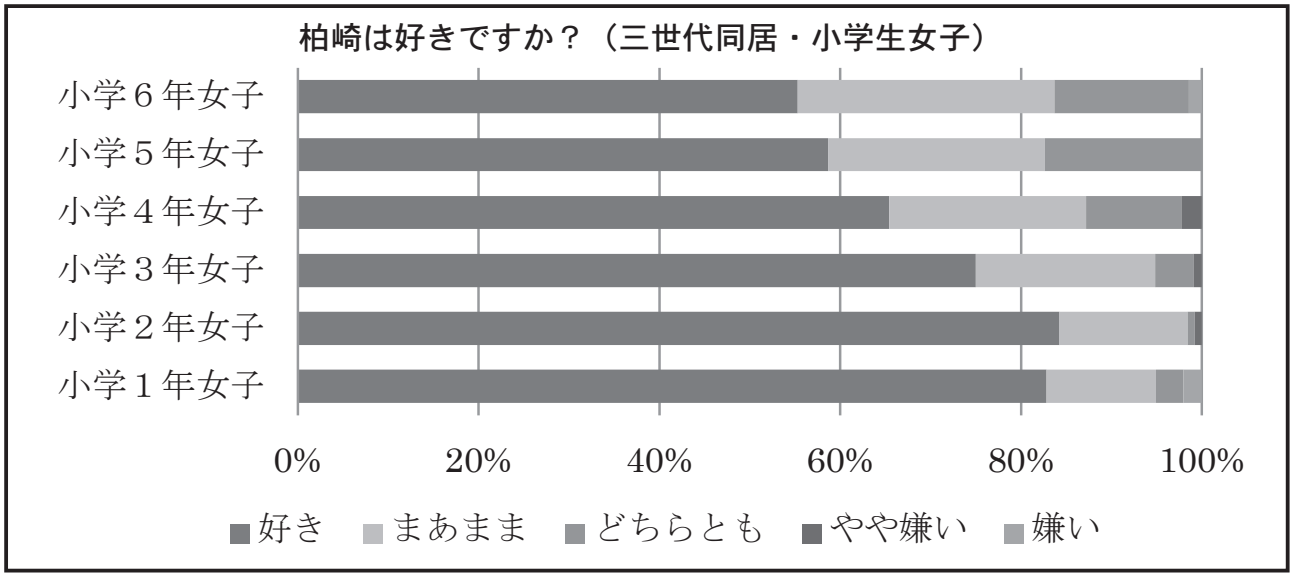


図 1-2-m　祖父または祖母と同居はしていないが近くに住んでいる、という男子児童（小学生）

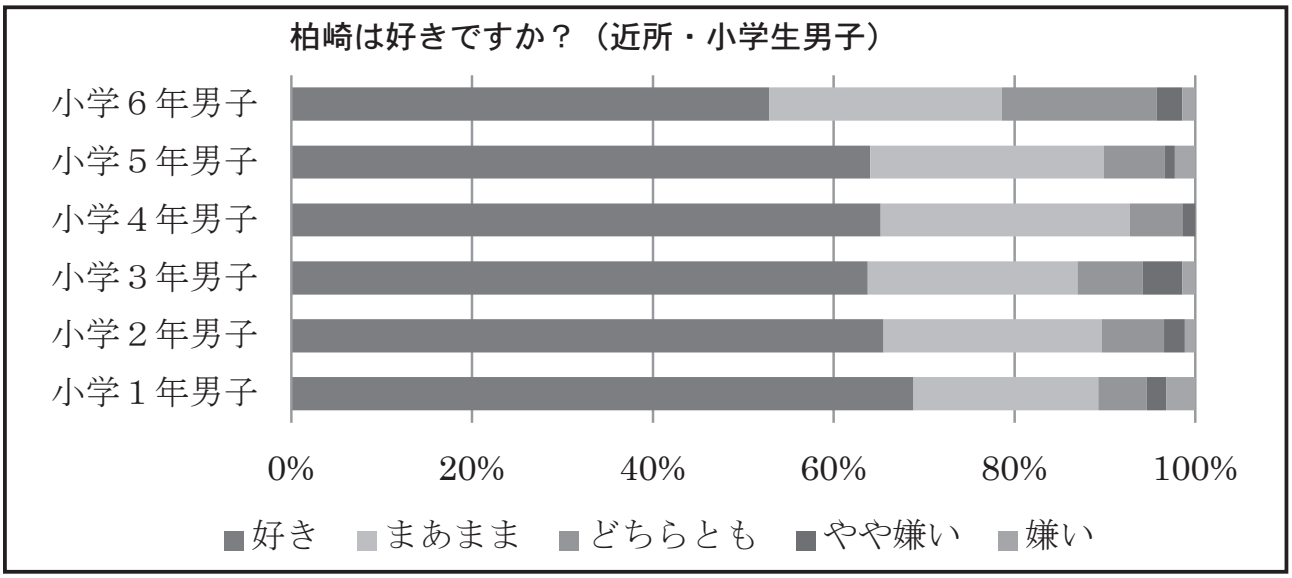


図 1-2-f　祖父または祖母と同居はしていないが近くに住んでいる、という女子児童（小学生）

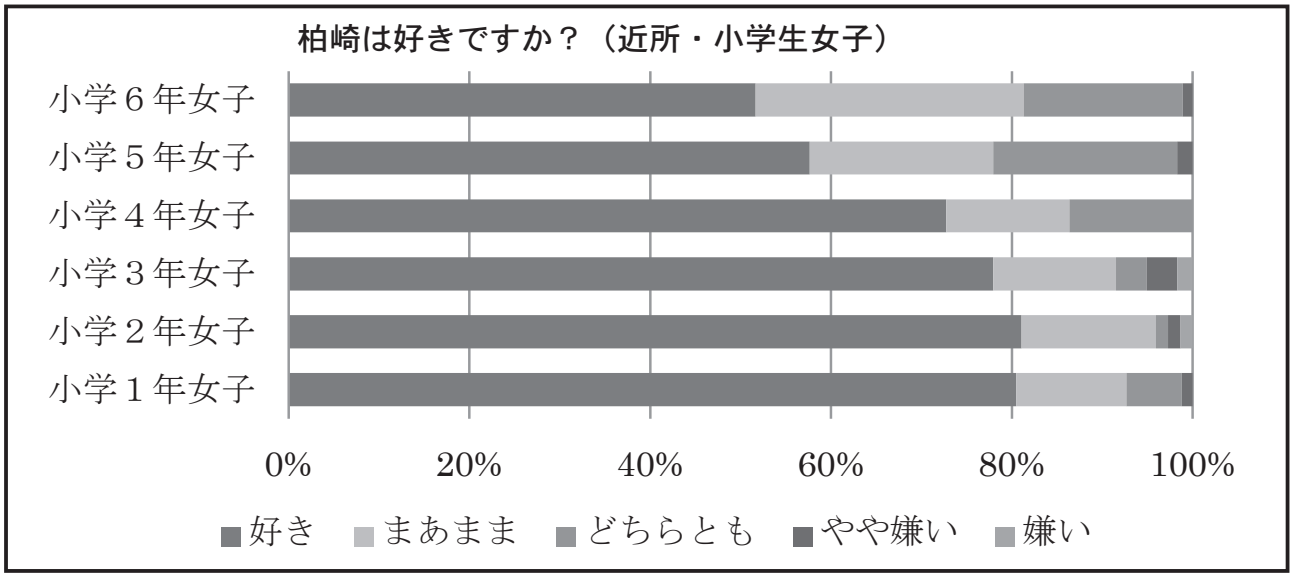


図 1-3-m　祖父や祖母とは同居していない（核家族などの家庭の）男子児童（小学生）

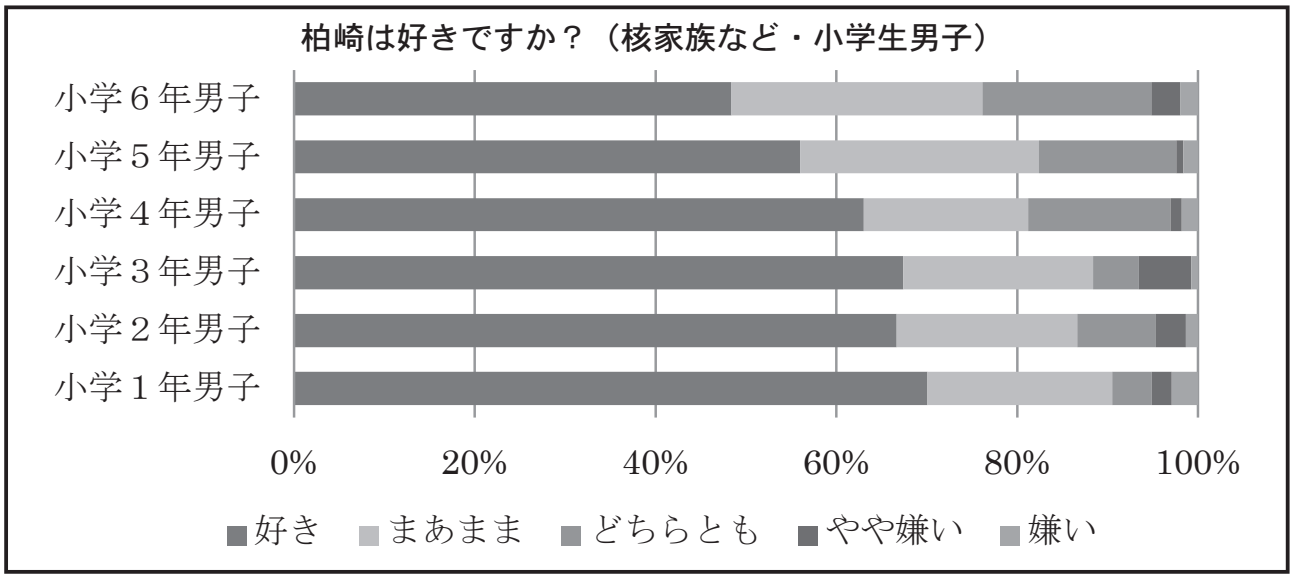


図 1-3-f　祖父や祖母とは同居していない（核家族などの家庭の）女子児童（小学生）

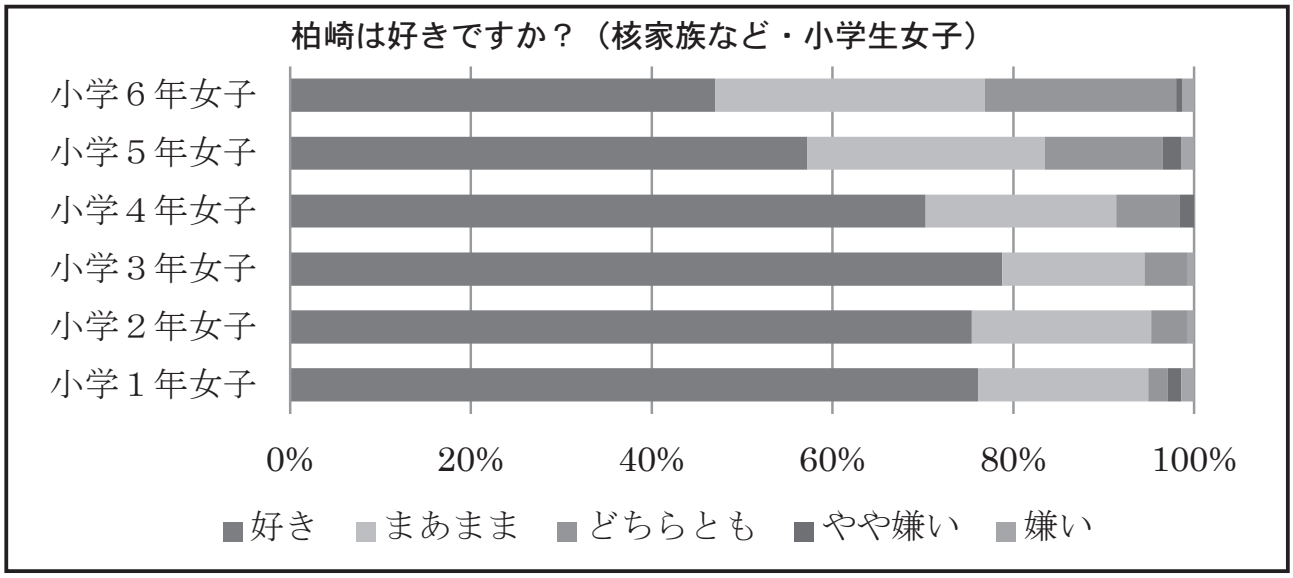


図 1-4-m　祖父または祖母と同居している、と答えた男子中高生

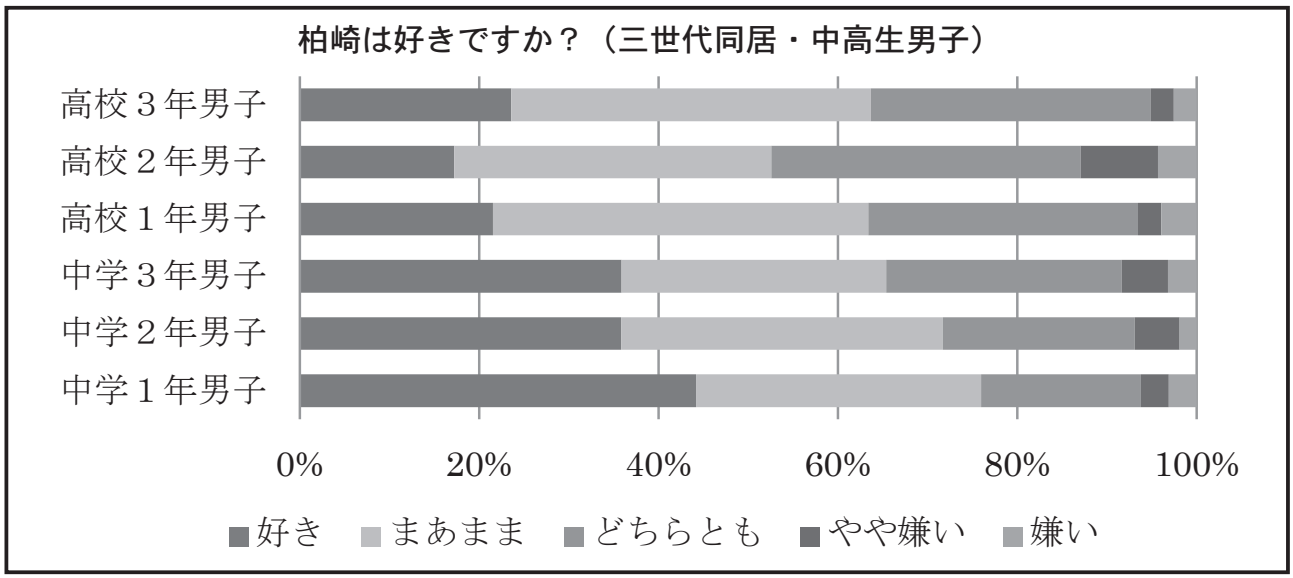


図 1-4-f　祖父または祖母と同居している、と答えた女子中高生

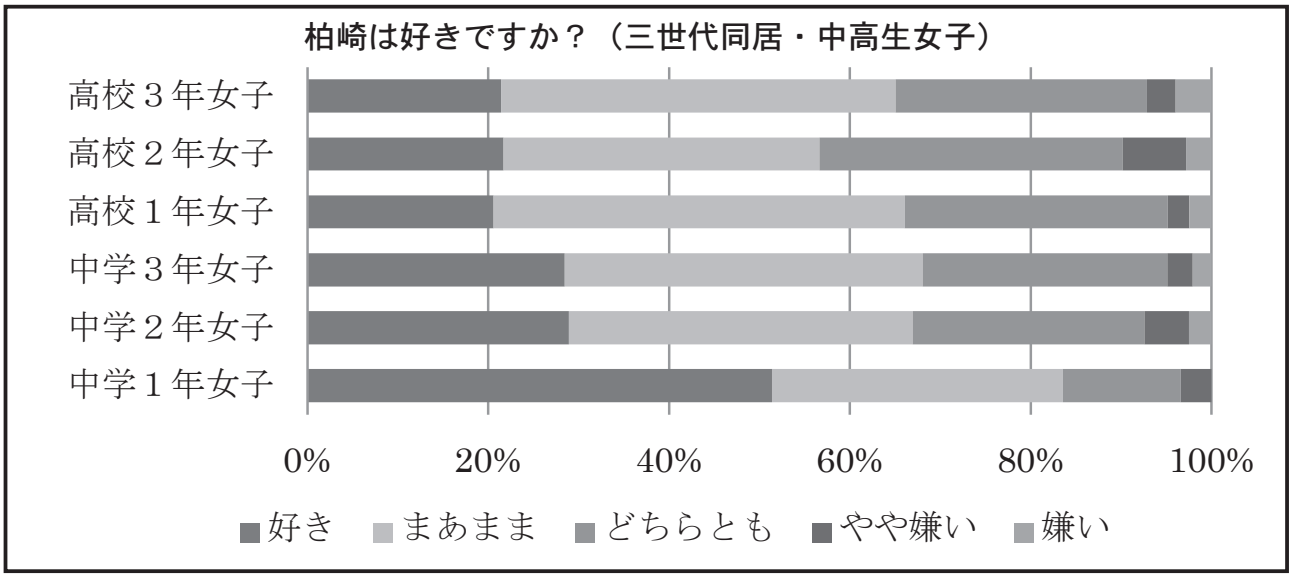


図 1-5-m　祖父または祖母と同居はしていないが近くにいると答えた男子中高生

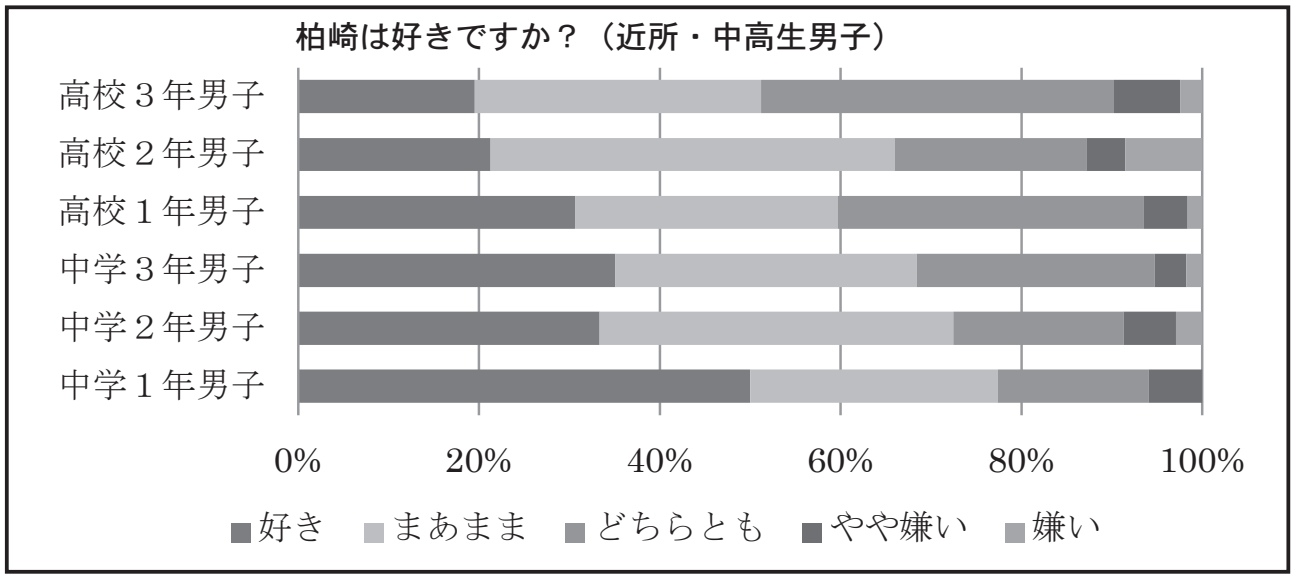


図 1-5-f　祖父または祖母と同居はしていないが近くにいると答えた女子中高生

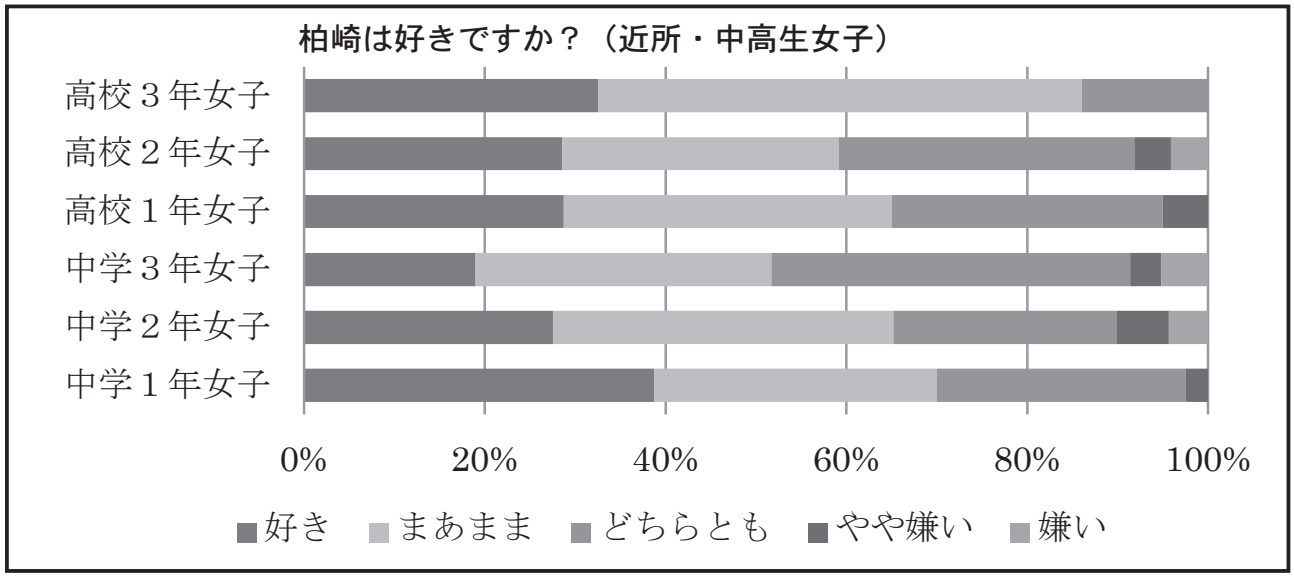


図 1-6-m 「いいえ（祖父または祖母と同居していない）」と答えた男子中高生

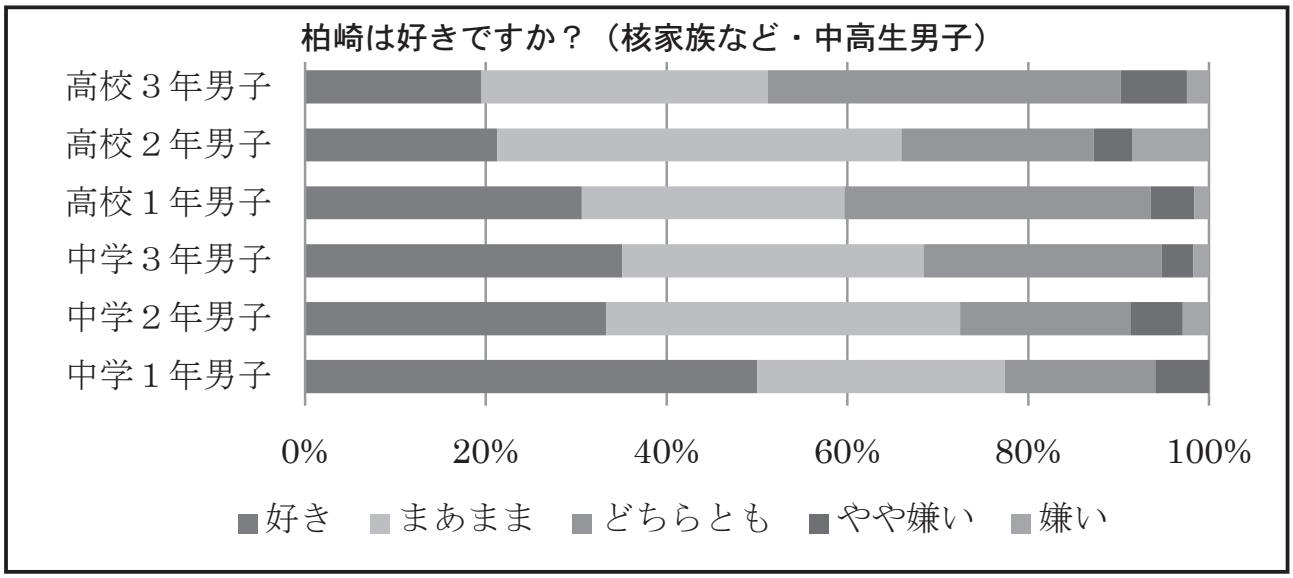
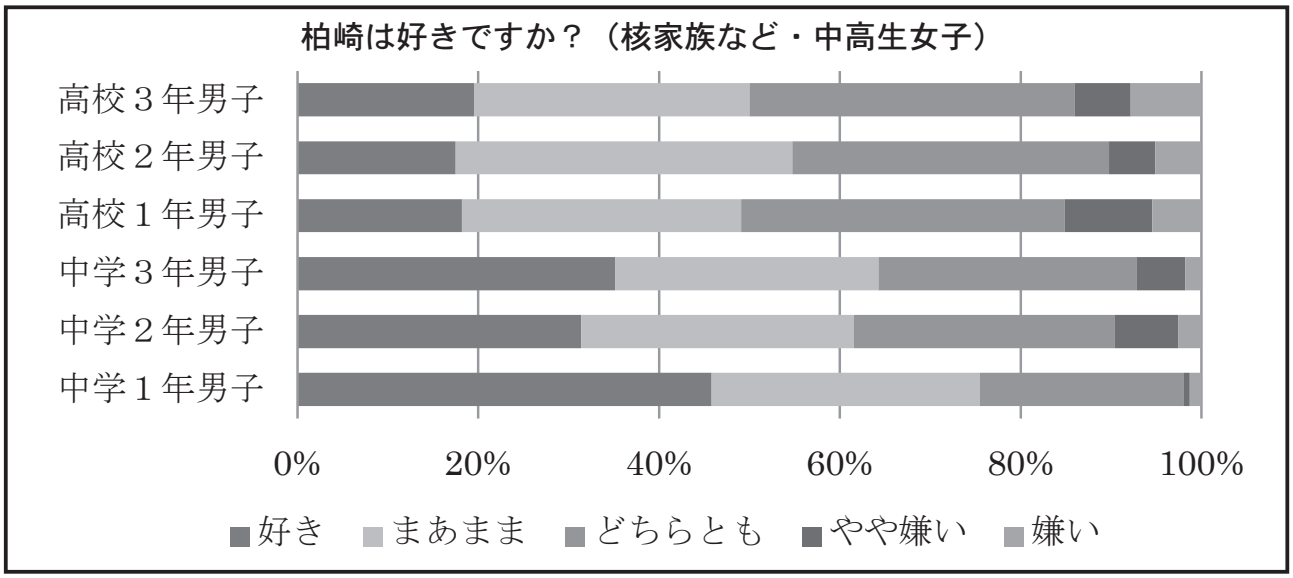


図 1-6-f 「いいえ（祖父または祖母と同居していない）」と答えた女子中高生



これら図 1-1-m から図 1-6-f で示されたグラフを俯瞰的に見てまず目に留まることは

・柏崎の子供たちの「柏崎が好きですか」というという問いに対する答えには学年が進むにつれて「好き」の割合は下がる傾向がある、男女の間ではあまり差はなく（学年が進むにつれて「好き」の割合下がっていく様子も男女の間でのぼ同じである、等々の傾向がある、

ということである。それに加えて気が付くことは、

・「祖父または祖母と一緒に住んでいる」および「一緒には住んでいないが近くに住んでいる」と答えた児童・生徒と「いいえ（祖父、祖母のいずれとも同居してない）」と答えた児童・生徒との間で（前者のほうが若干、肯定的な答えをしている児童・生徒の割合がやや高いものの）あまり差はない、

ということである。この「あまり差がない」ということは（前節で言及した通り、「祖父母の代から柏崎に居住している」と思われる家庭の子供の「柏崎愛」がそうでないような家庭の子供の「柏崎愛」と決して大きく隔たっていないかも知れない、ということを示唆していると解釈するべきであり）重要である。[11]

３．２　大人になったら柏崎に住みたいですか？

では、同様に、

・「大人になったら柏崎に住みたいと思いますか。」（選択肢：「思う」「どちらかといえば思う」「わからない」「どちらかといえば思わない」「思わない」）

という問いに対する反応はどうであろうか。それは以下の図 2-1-m ～図 2-6-f の通りである。

[11]さらに言を加えるならば、もし「柏崎が好きでない、と答えている子供もいるが、そのような子供は主にいわゆる転勤族などの家庭の子弟子女であって、代々柏崎に住んでいるような家庭の子供は故郷である柏崎のことは好きと思っているのでは」といった推測が（柏崎に縁の深い大人たちの間に）あるとすれば、そのような期待や認識は後になって「油断」と言われる可能性がある、という警鐘を（この結果は）発していると筆者は考える。

図 2-1-m　柏崎に「祖父母と同居している」という男子児童（小学生）

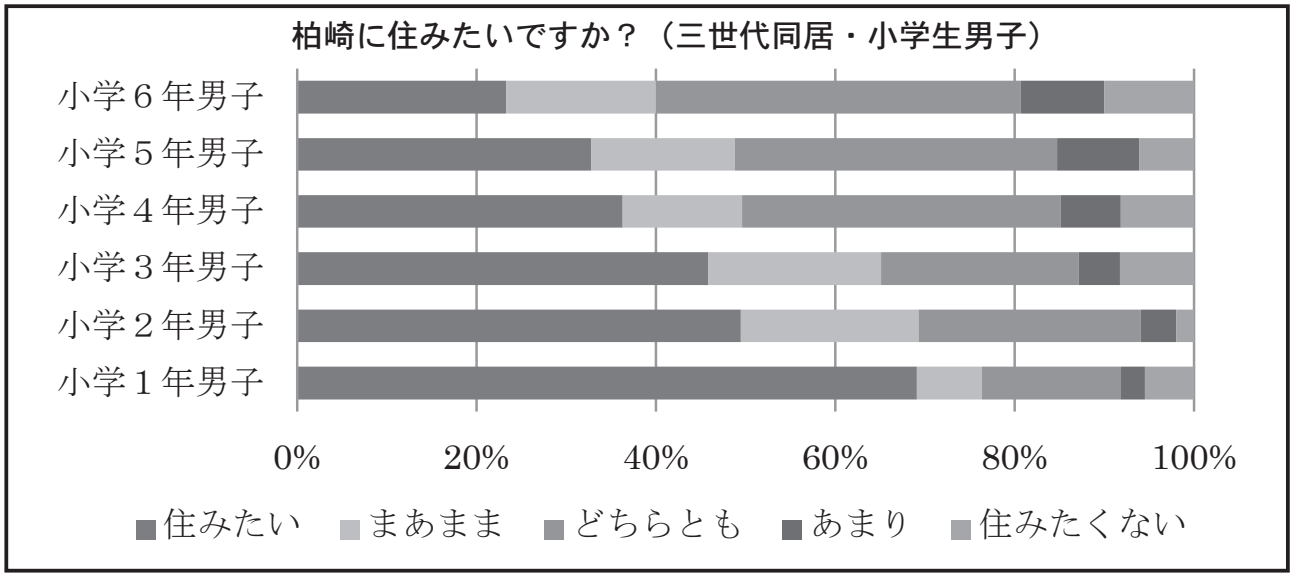


図 2-1-f　柏崎に「祖父母と同居している」という女子児童（小学生）

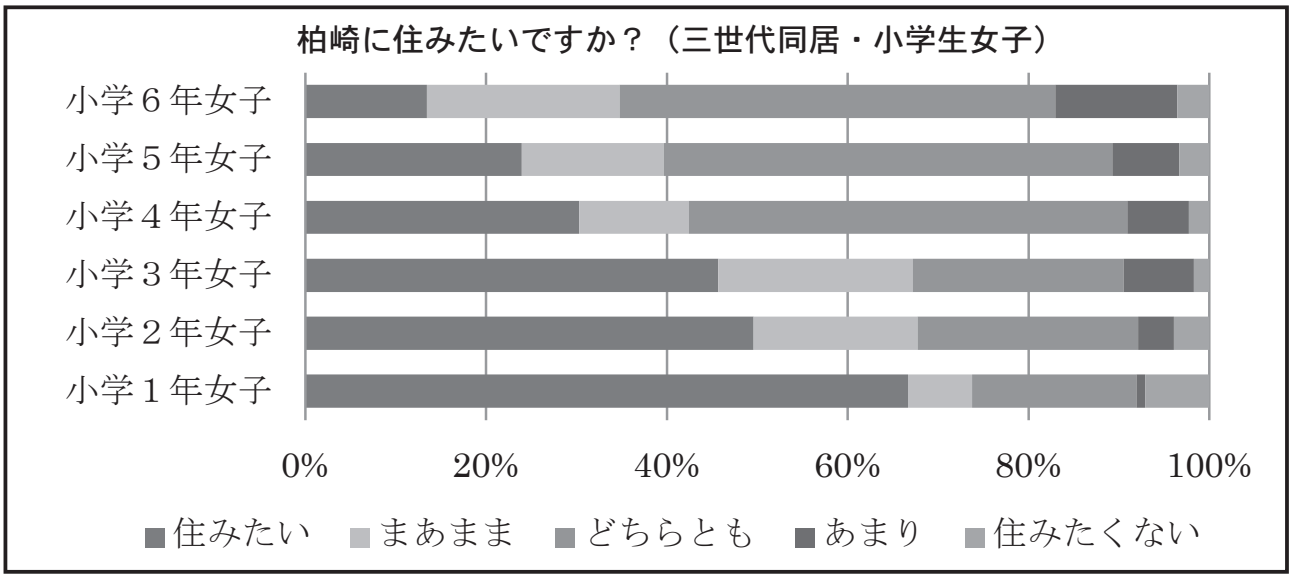


図 2-2-m　祖父または祖母と同居はしていないが近くに住んでいる、という男子児童

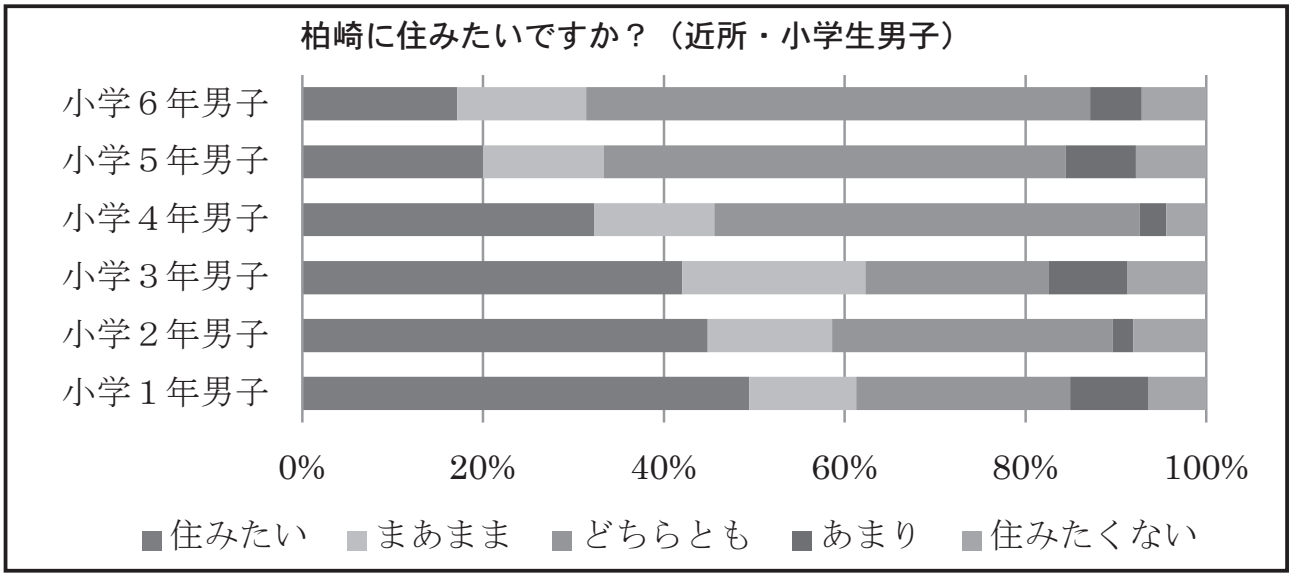


図 2-2-f　祖父または祖母と同居はしていないが近くに住んでいる、という女子児童

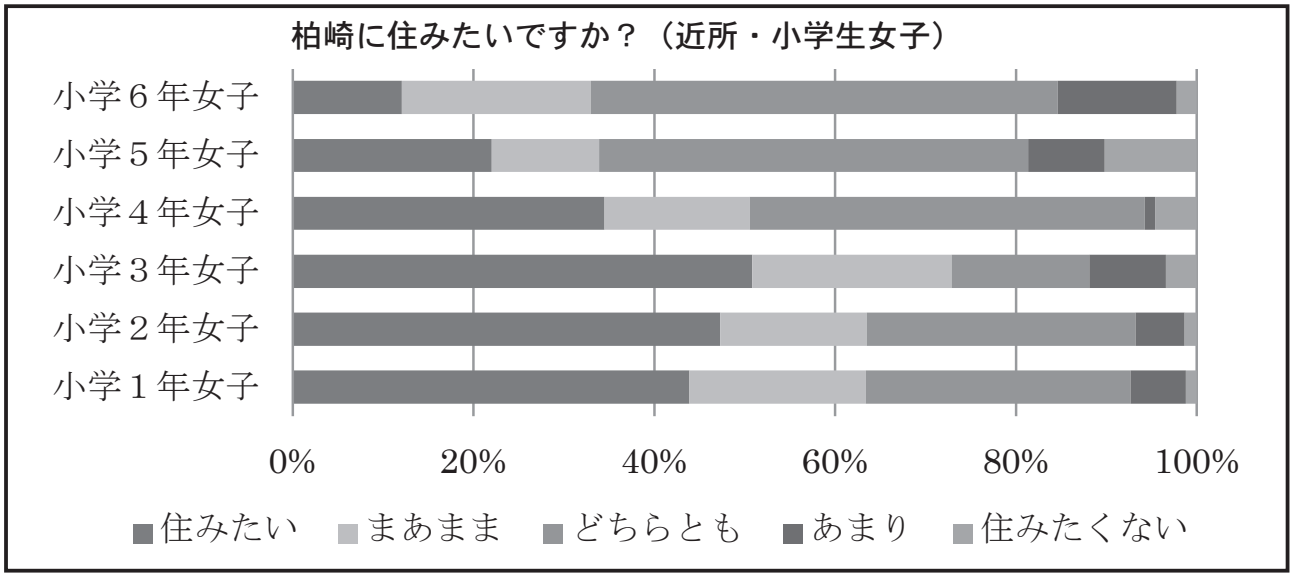


図 2-3-m　祖父や祖母とは同居していない（核家族などの家庭の）男子児童

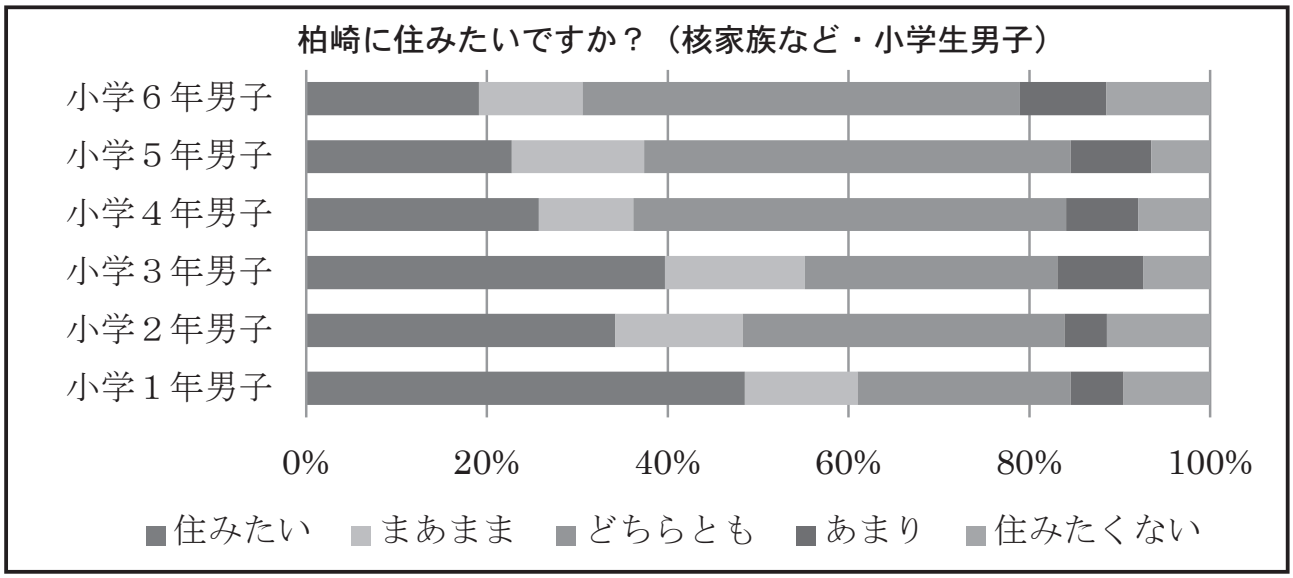


図 2-3-f　祖父や祖母とは同居していない（核家族などの家庭の）女子児童

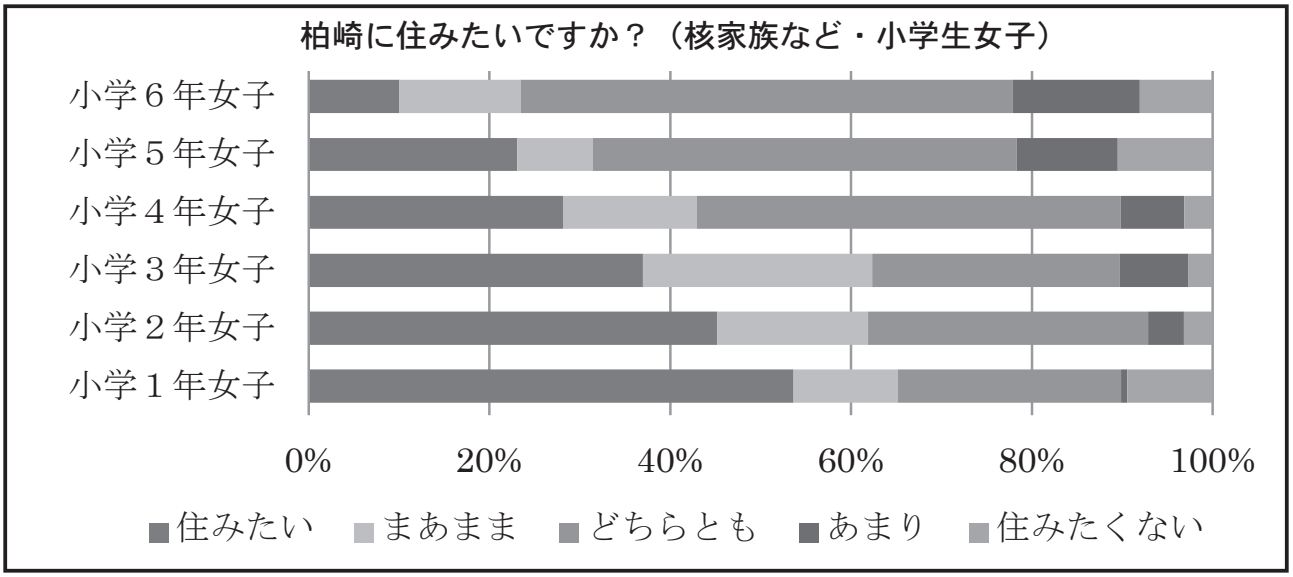


図 2-4-m　祖父または祖母と同居している、と答えた男子中高生

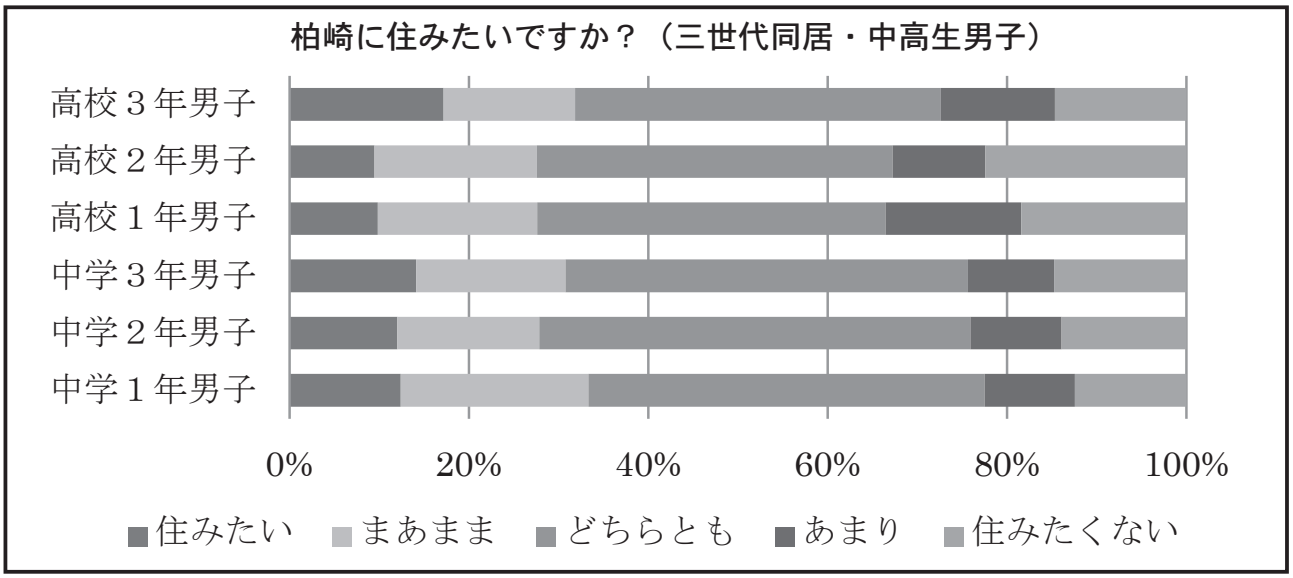


図 2-4-f　祖父または祖母と同居している、と答えた女子中高生

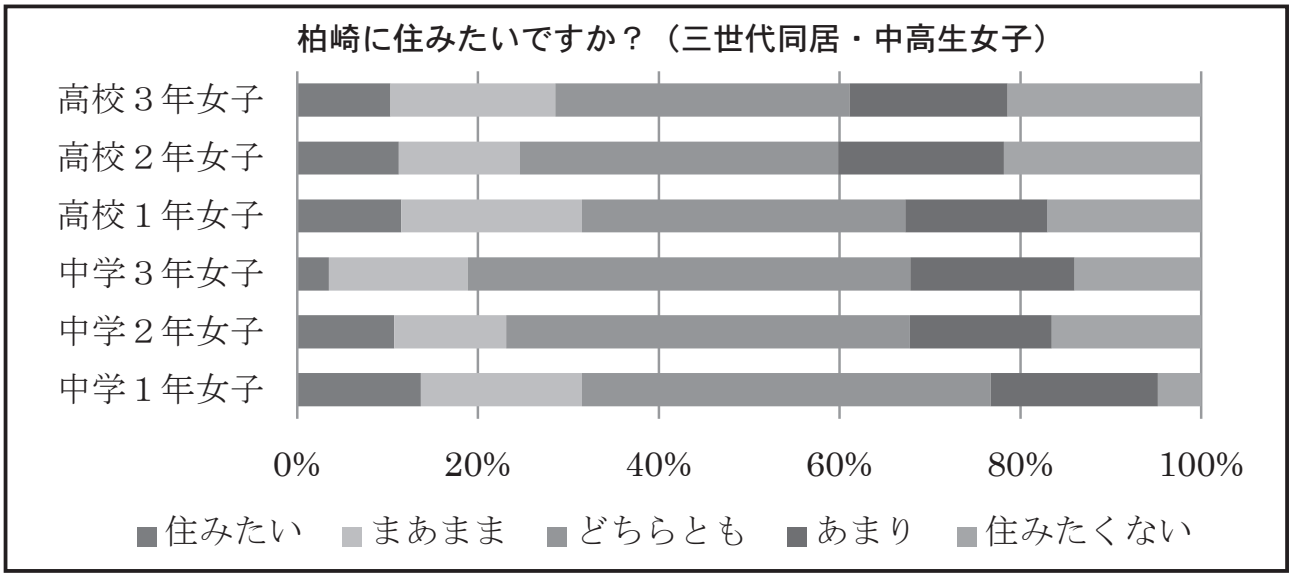


図 2-5-m　祖父または祖母と同居はしていないが近くにいると答えた男子中高生

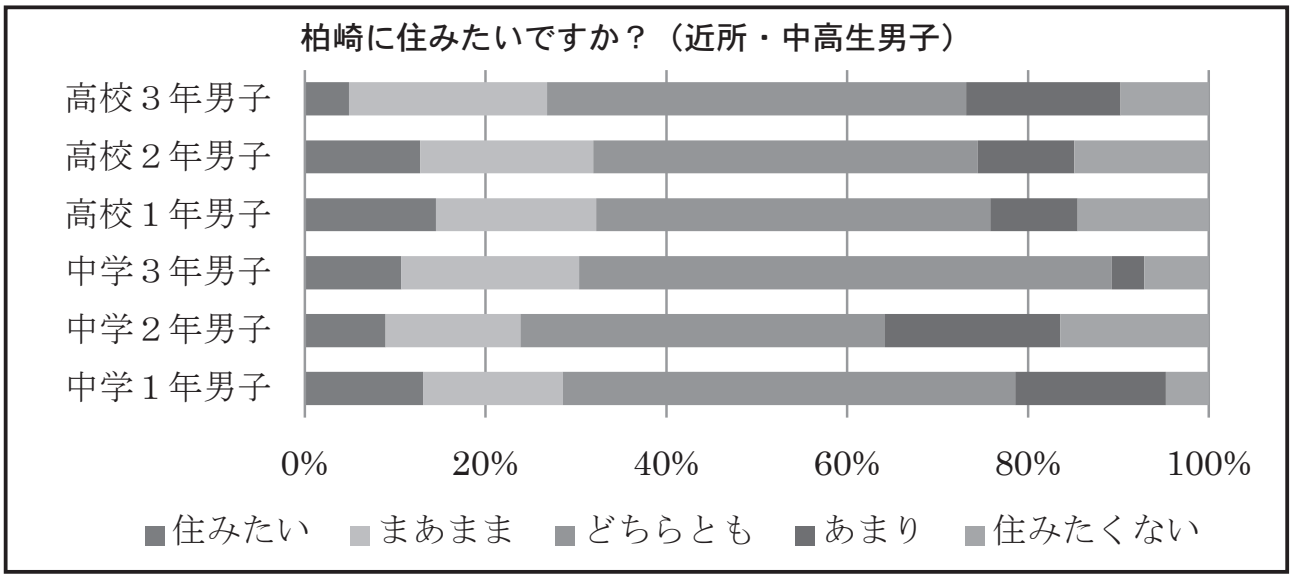


図 2-5-f　祖父または祖母と同居はしていないが近くにいると答えた女子中高生

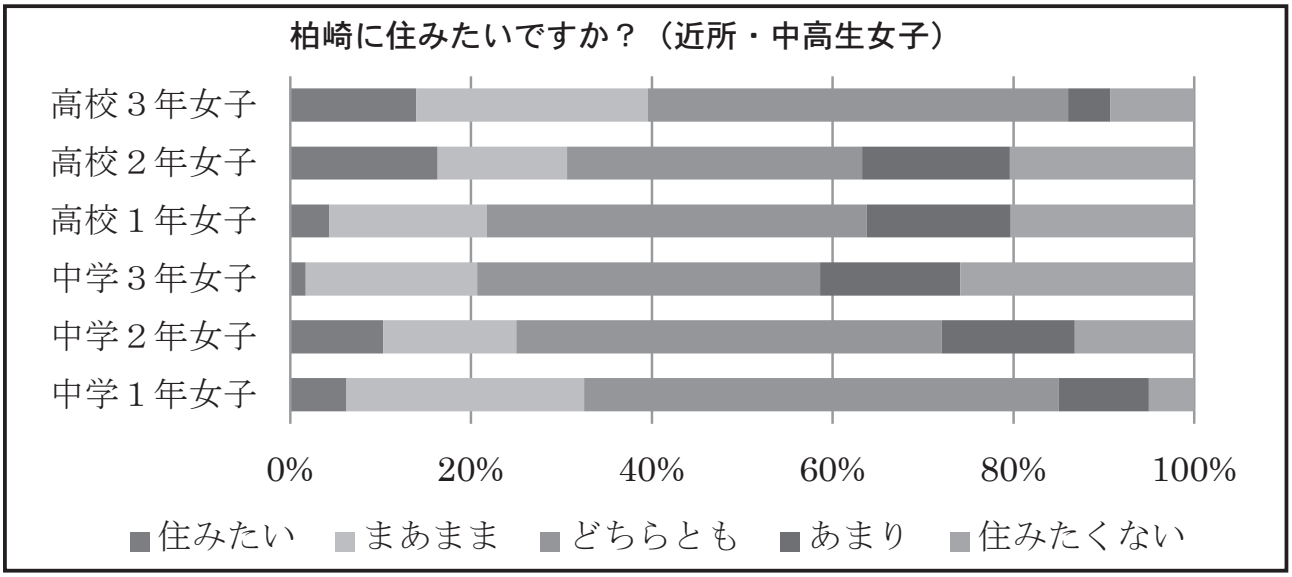


図 2-6-m 「いいえ（祖父または祖母と同居していない）」と答えた男子中高生

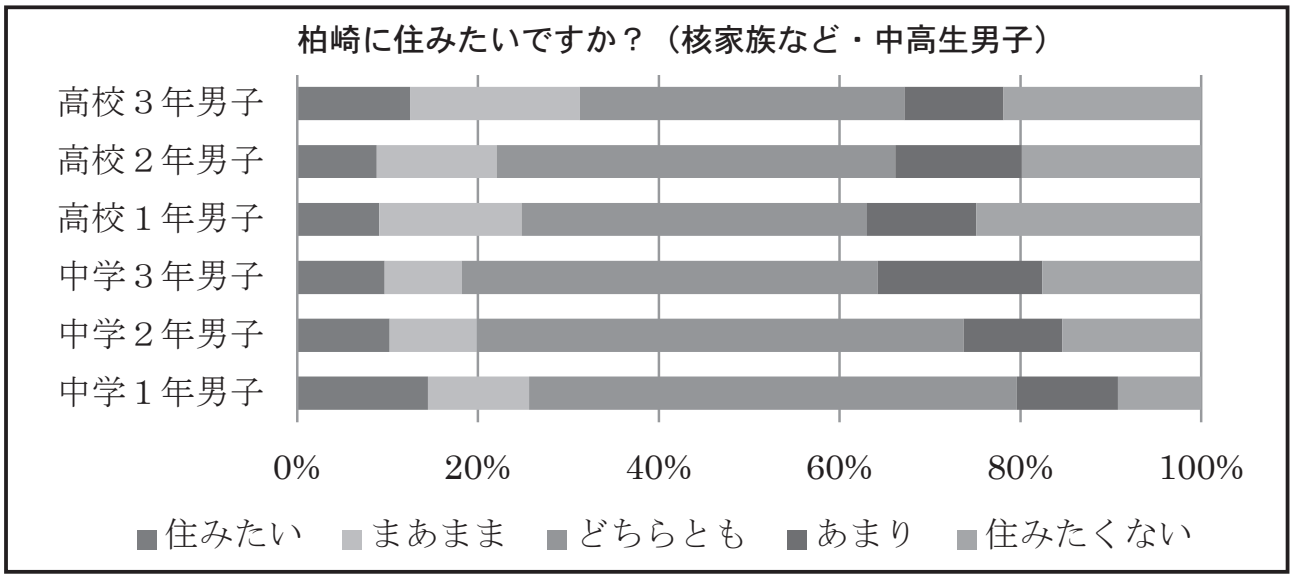
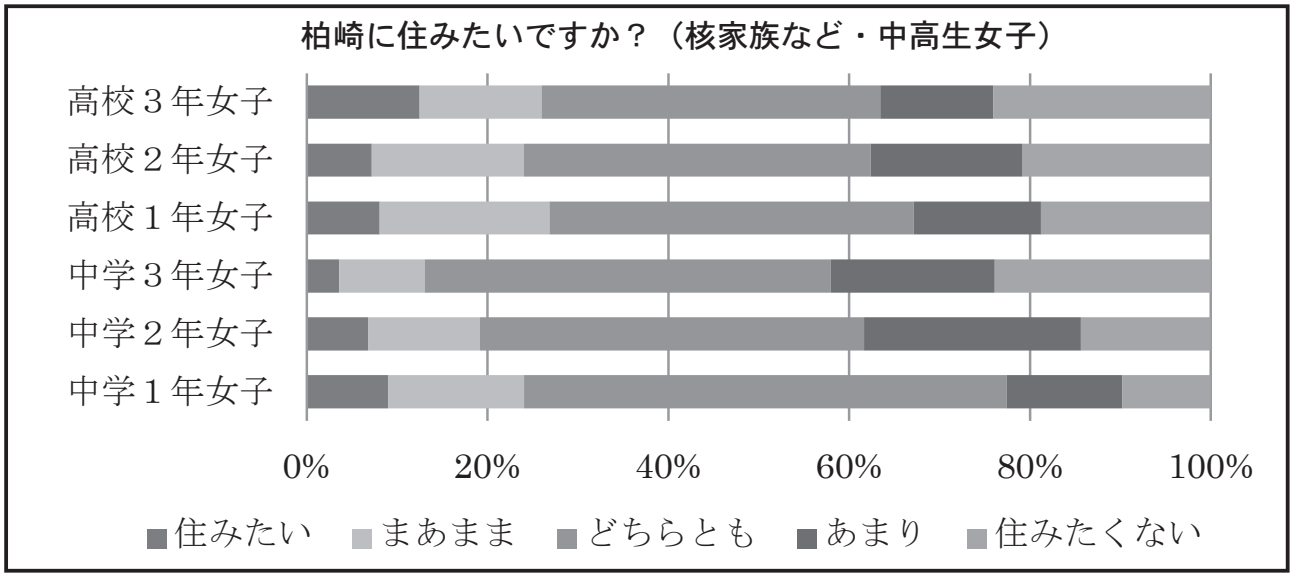


図 2-6-f 「いいえ（祖父または祖母と同居していない）」と答えた女子中高生



これら図 2-1-m ～図 2-6-f のグラフは（３．１節でみた「柏崎が好きですか」という問いに対する反応を示すグラフと同様で）それらを俯瞰的に見比べるならば、まずは

・「大人になったら住みたいかどうか」という気持ちについても学年が進むにつれて「住みたい」の割合が下がる傾向がある、男女の間ではあまり差はなく学年が進むにつれて「住みたい」の割合が下がっていくことも男女の間で同じである、等々の傾向が見られる、

ということが分かる。第二に、やはり「祖父または祖母と一緒に住んでいる」および「一緒には住んでいないが近くに住んでいる」と答えた児童・生徒と「いいえ（祖父、祖母のいずれとも同居してない）」と答えた児童・生徒との間で（前者のほうが若干、肯定的な答えをしている児童・生徒の割合が高いものの）「あまり差はない」ことが分かる。

そして第三に分かることは「柏崎は好きですか」という問いに比べて「大人になった時に柏崎に住みたいですか」という問いへの肯定的な反応は大きく下がるということである。すなわち柏崎の子供たちには

・「柏崎のことは嫌いじゃないよ（好きだよ）、けど大人になったときに住みたいか（住んでいたいか）と問われると、どうかな…」

というマインドがある（漠然とかも知れないけれども、どうやら確かにあるようだ）ということである。

小まとめ

以上、本節では「祖父または祖母と一緒に住んでいる（同居している）」「一緒に住んではいないが近所にいる」「同居していない」という家族構成で児童・生徒を分け、そのような家族構成の家庭の小学生・中学生・高校生それぞれについて「学年ごと・男女ごと」に「柏崎愛」ともいうべき「柏崎が好きですか」「大人になったら柏崎に住みたいですか」という問いへのレスポンス（すなわち返答）の状況を俯瞰した。その結果は、

・男女ともに年齢が進み、学年が進むと共に「柏崎愛」は薄れる傾向がある
かつ
・三世代同居家族であるか核家族であるか、といった家族形態ごとに分けて見たところ、あまり差がない

というものであった。そして上に述べた２点のうち「家族形態ごとに分けて見たところ、あまり差はない」という（定性的な）結果は「望ましい結果」ではなく、「祖父や祖母と一緒に暮らしている児童・生徒」あるいは「祖父や祖母が近所に住んでいる」という、いわゆる「柏崎っ子」と思われるような児童・生徒からからは本来もっと積極的な「柏崎愛」が発せられているべきでは、というのが著者の感じているところである。[12]

次のセクションでは、「では、どうすれば子供の地域愛・柏崎愛」というものは育つのか、大きくなるのか、ということについて、今回の調査から「少なくともこういうことは言える」と言える範囲での、有効な手立てというものを探りたいと考える。

４．地域愛を育む可能性：地域行事への参加と「柏崎愛」

前節で述べてきたような、「柏崎が好きですか」および「大人になったら柏崎に住みたいですか」という、柏崎に対する愛着の念（すなわち「柏崎愛」）を直接的に問う質問に対する子供たちの反応を見たうえで、ではそのような「地域愛」「郷土愛」「柏崎愛」は、どのようなことをすれば子供たちの中により強く育まれてくるのか、ということは興味の持たれる問いであり、またそのような問いに対する答えを探すことは柏崎を人口流出・人口減少という事態から守ろうとする上で重要である。
そのような「子供の地域愛」を育む可能性のある一つの事柄は「お祭りや地域のクリーンデー[13]など、地域の住民が町内会単位で一斉に参加し行う行事」に積極的に参加する、ということであろう。すなわち（大人の目線から述べるならば）「子供を、地

[12]そのような危機感は、漠然とではあるけれども、うっすらと柏崎地域の中にはある程度ずっとあったし、今もそれはある、と著者は感じている。そしてそれはおそらく柏崎地域に暮らす多くの一般市民にとっても共通の感覚内容であろうと私は感じている。

域の行事に積極的に連れて行ったり参加させたりすることは、子供の柏崎愛を育むうえでプラスになるのでは」ということである。

そのような「地域行事への参加」と「地域愛」との間に相関関係があるのかないのか、というこう疑問に対しては、

・「地域行事に積極的に参加している」「時々参加している」「あまり参加していない」と答えた集団ごとに「柏崎愛」とも言うべき「柏崎が好きですか」および「大人になった時、柏崎に住みたいですか」という問いに対するレスポンスの状況がどうであるかを調べればよい、

ということになる。そこで筆者としてもそのような分析は今回当然行ってみた。そしてその結果をここで提示したいと思うが、ページ数の節約のため、また

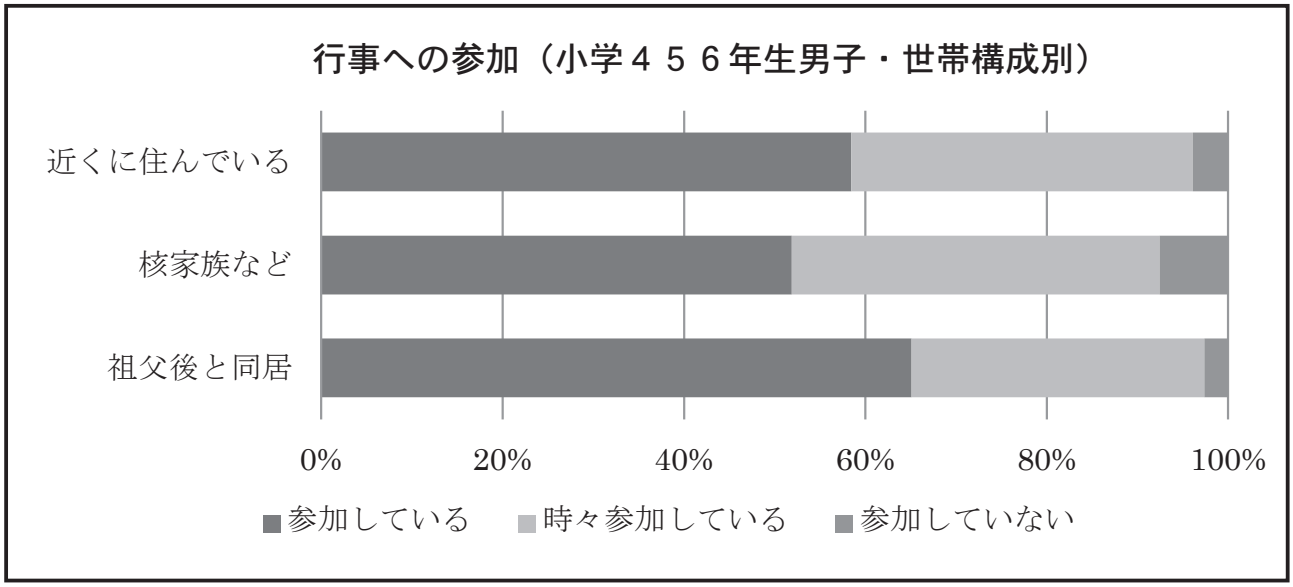
・中学生以上になると子供たちは「部活動が忙しく、地域の行事は二の次」といった状態になっている

ということが十分推測されることを踏まえ、ここでは「まだ中学に行く前の子供たち」すなわち「小学４・５・６年生」についてのみ結果を述べることにする。

４．１　そもそも、地域活動に、参加しているのか

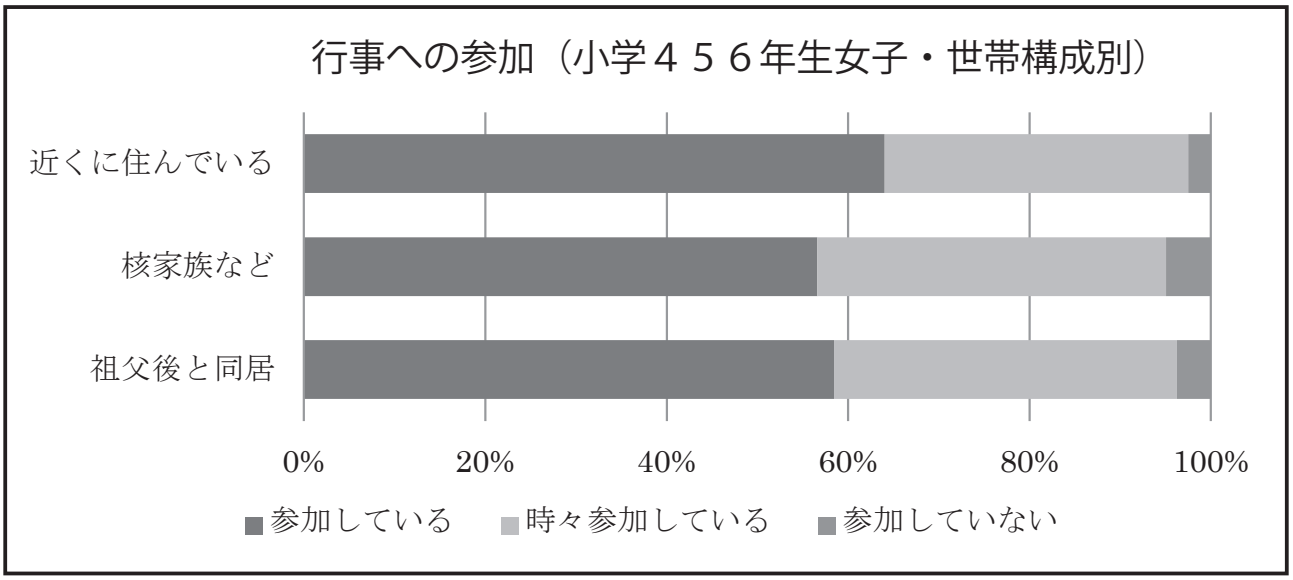
ところで子供の地域の行事への参加が子供の柏崎愛を育むうえでプラスになるのかどうか、ということを調べるにあたり、そこに踏み込む前段階の「関連する疑問」として「そもそも最近の子供は地域活動に参加をしているのだろうか（親はきちんと子供に地域活動に参加をさせているのだろうか）」ということについて「知りたい・知っておきたい」という気持ちが湧くならば、それは自然なことであろう。そこで、まずこの「そもそも子供たちは地域活動に参加しているのか」ということを集計し、述べることにしたい。アンケートの**「あなたはクリーンデー（地域の一斉掃除活動）やお祭りなど地域の行事に参加していますか」（選択肢：「参加している」「たまに参加している」「参加していない」）**という問いに対して、やはり**「祖父または祖母と一緒に住んでいる」**および**「一緒には住んでいないが近くに住んでいる」**と答えた児童と「**いいえ**（祖父、祖母のいずれとも同居してない）」と答えた児童ごとに分けてその回答を集計した結果が次の図 3-1-m と図 3-1-f である。

図 3-1-m　男子児童（小学４・５・６年生混合での集計）



[13]クリーンデーとは地域住民による､地域（それぞれの町内会の域内）の共同一斉清掃作業日のことである。ただしそこでの「清掃」とは単に「まちを箒（ほうき）で掃いてきれいにしましょう」という「町内美化活動」ではなく「側溝や排水溝にたまった泥の（近隣住民自身による）一斉除去と一斉回収」など、「生活環境を近隣住民で一斉に整備しましょう」というニュアンスの強い活動である（と筆者は理解している）。

図 3-1-f　女子児童（小学４・５・６年生混合での集計）



これら２つの図から分かることは「祖父母が同居または近くに住んでいる」という児童と「核家族」のような家庭の児童との間で、地域行事への参加ということについて、（そこでの返答は**「参加している」「たまに参加している」「参加していない」**という子供たち自身による主観的な自己申告ではあるが）差はほとんど無いということである。すなわち児童・生徒の親（保護者）が「大人になって初めて柏崎に移り住んできた」といった家庭が多いはずの「核家族など」の世帯の子供も、地域の行事には参加をしている（児童本人は主観的にそう感じている）のであり、例えば「転勤族の家庭の子供は地域行事への参加に対して積極的でないのでは」といった「疑念にも似た仮説」がもし柏崎で暮らす人の間にあるとするならば「そのようなことはないですよ」というのが本調査からの返事ということになる。すなわち、仕事等の都合などで縁あって柏崎に来て、柏崎で核家族として子育てをしているような家庭も、その多くは子供を（もともと柏崎に住んでいた家族がそうであるのと同じように）地域行事に参加をさせ、地域に溶け込む努力をしているという事がこれらの図からは推察されるのである。

４．２　行事への参加と「柏崎に住みたい気持ち」の強弱との相関

次に、では果たして子供たちを「お祭りや地域のクリーンデーなど、地域の住民が町内会単位で参集し行う行事」に積極的に参加させるということが子供たちの「柏崎愛」を育むうえでプラスになっていると言えるかどうか、ということを述べていきたい。その際、上に見た通り「祖父または祖母と暮らしている」という家庭であっても「核家族のような、祖父母とは同居していない家庭」であっても地域行事への参加の状況は大きな差は見られないことを踏まえ、そのような家族構成では子供たちを分けず、単に「地域の行事に参加している」「たまに参加している」「参加していない」のどれを選んだかに応じて（小学４・５・６年生の男女それぞれの）子供たちを分けて、それぞれのレスポンスの子供たちごとに「柏崎が好きですか」という問いに対する反応の状況を示し、見比べることにする。図 4-1- m と図 4-1-f はそのような分け方をした時の「柏崎は好きですか」という問いに対する反応の状況、そして図 4-2- m と図 4-2- f は「大人になったら柏崎に住みたいですか」という問いに対する反応の状況である。

図 4-1-m「行事への参加状況」と「柏崎が好きですか」の相関（小４５６年生男子児童）

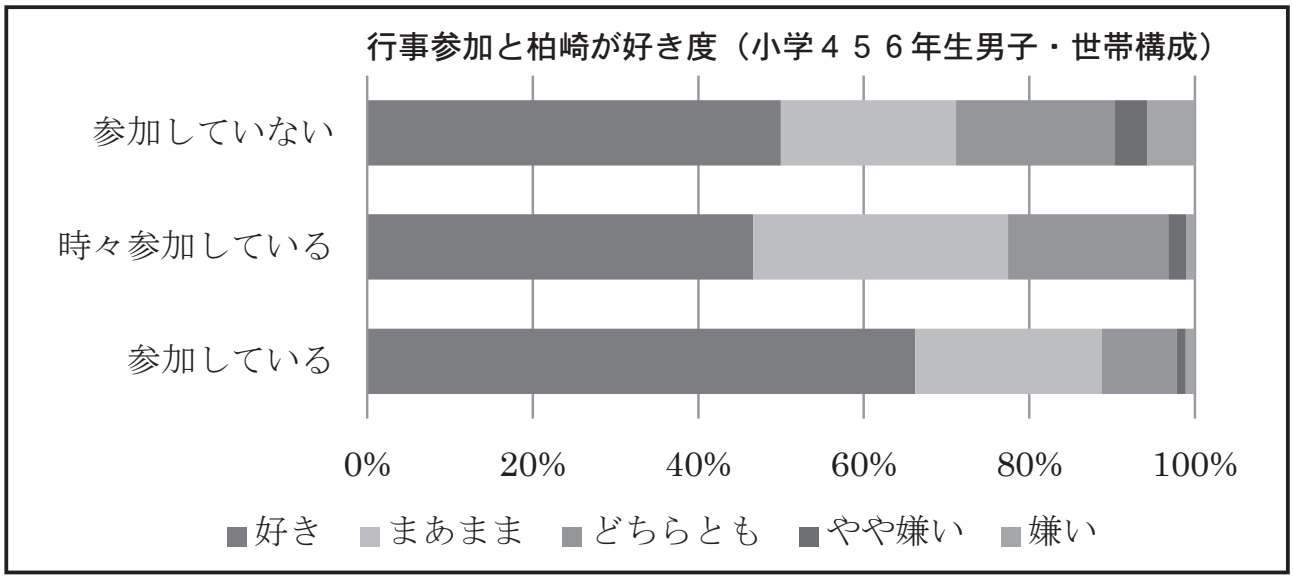


図 4-1-f「行事への参加状況」と「柏崎が好きですか」の相関（小４５６年生女子児童）

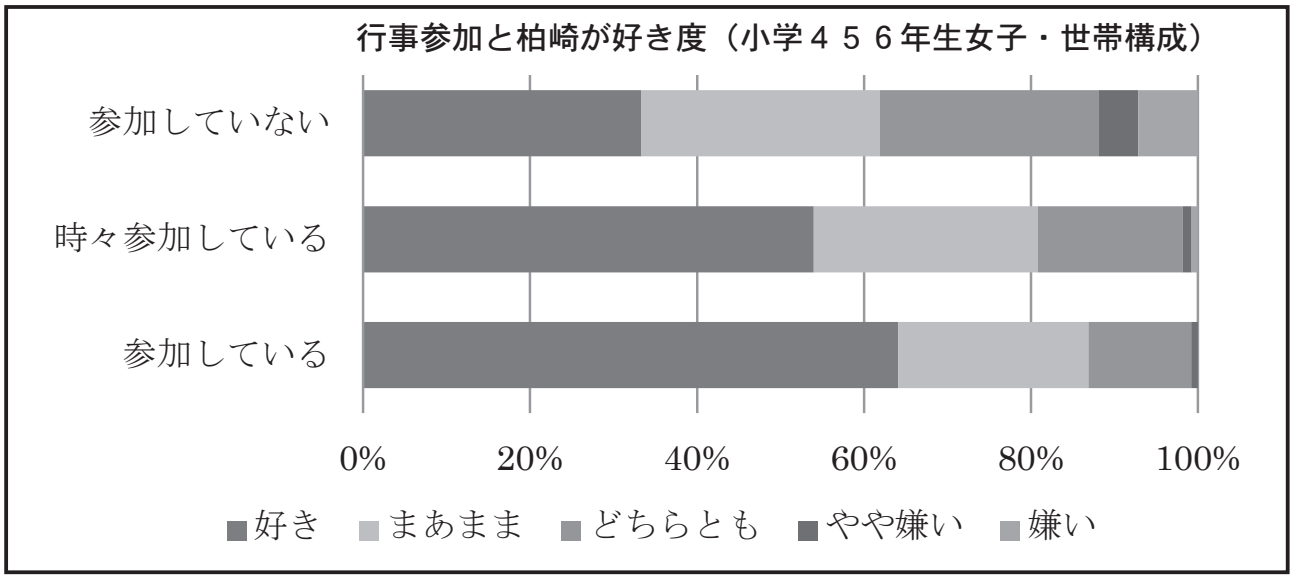


図 4-2-m「行事への参加状況」と「大人になった時、柏崎に住みたいかどうか」の相関（小４５６年生男子児童）

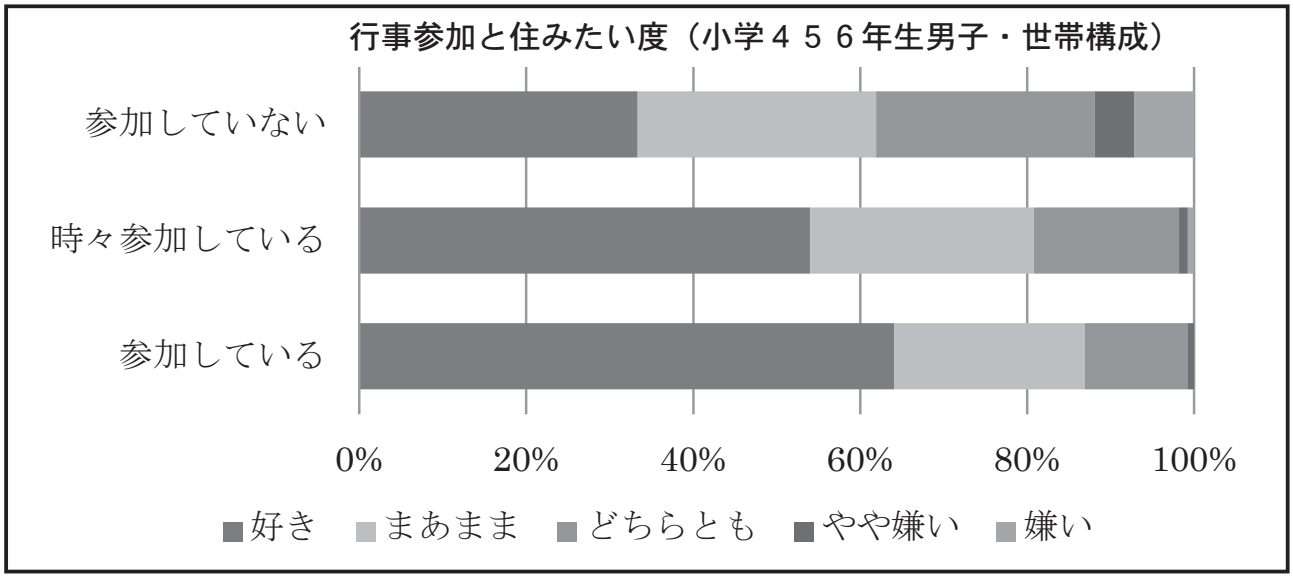
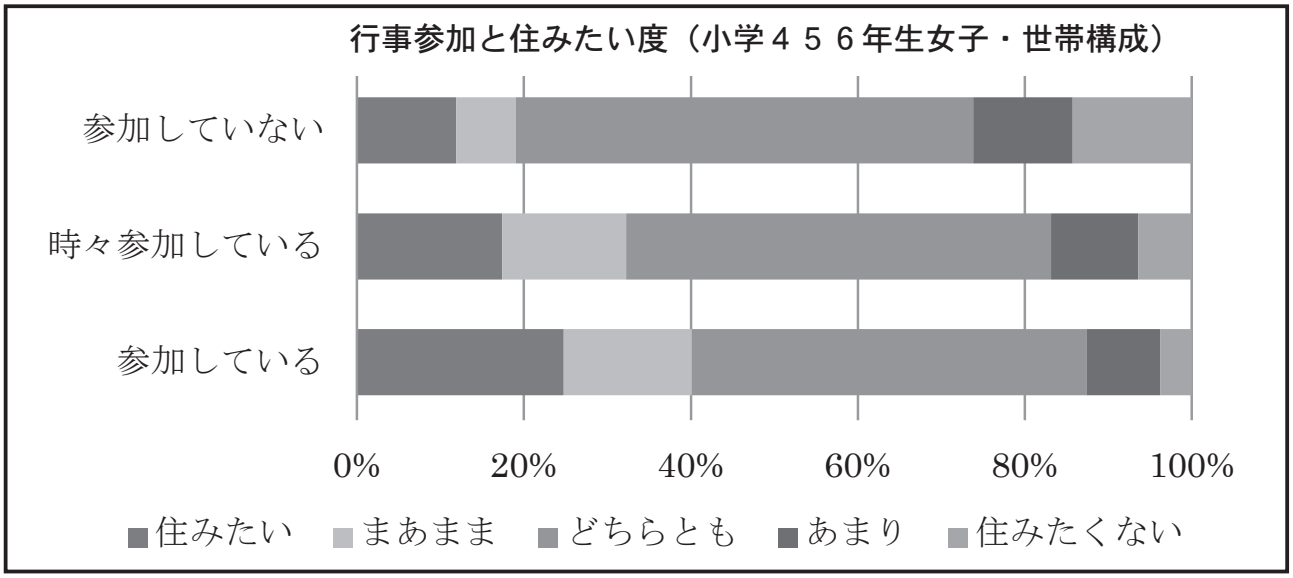


図 4-2-f「行事への参加状況」と「大人になったら、柏崎に住みたいと思いますか」の相関（小４５６年生女子児童）



これら図 4-1-m から図 4-2-f までの４つの表から分かることは「地域の行事に参加している」という事と、「柏崎愛」すなわち「柏崎が好き」あるいは「大人になったら柏崎に住みたい・暮らしたい」という気持ちとの間には明らかに正の相関がある、ということである。[14]もちろん「相関がある」ということと「因果関係がある」ということとは同じではない。すなわち「地域活動に参加することを通じて、児童が将来柏崎に住みたい気持ちを強くしている」のであれば因果関係があることになるが「もともと何か別の原因で柏崎愛が強く、将来柏崎に住みたい気持ちを抱いている児童は積極的に地域の行事にも小学生の頃から積極的に参加している」ということであればそれは単なる相関関係ということになる。後者である可能性は否定はできないが、前者のほうが自然な解釈であろう。すなわち因果関係が推測されると筆者は考えるのであり、上に示した結果は「子供を地域の行事に積極的に参加させる」ことは「地元愛（柏崎愛）」を育てる要因（の１つ）になっており、地域愛を涵養する上で有益であることを示唆しているというのが筆者の見解である。

５．若者、とりわけ高校生の「柏崎愛」

既に述べたように、今回の調査では（７年前の調査と異なり）中学生と高校生を分けて、異なるアンケート票および質問項目を用意した。中学生と高校生を区別した理由は、中学生と高校生とでは将来に対する心構えや心境などは全く異なると考えたからである。すなわち高校生は例えば普通科では高校２年生からは文科系と理科系に分かれ、あるいは進学する可能性のある大学も次第に具体化して来るなど、自分の進路や将来の就きたい職業などが具体化して来るのに対し、中学生はそのような将来イメージを抱く前の段階で「どの高校に進学するか（進学できるか）」ということに腐心している段階であると考えられる。このように、将来への意識というものは中学生と高校生では質的に大きく異なっていると考えられ、両者を区別してそれぞれに応じたアンケート票を用意することは必要かつ重要である。

そのような、中学生とは区別して作成した高校生対象のアンケートには「中学生には尋ねていないけれども高校生には尋ねている」という、いくつかの質問が含まれている。そのような問いには**「高校卒業後、継続して柏崎に住みたいですか」**という問い、そして**「継続しては住みたくない」**と答えた生徒にはその理由を尋ねる問い、そして**「大人になった時、柏崎に住むことになると思いますか」**という問い、そして親など**「一緒に暮らしている人は、将来あなたが大人になったら柏崎に住んでほしい（柏崎に戻ってほしい）と願っていますか」**という問いなどがある。以下ではそれら「高校生だからこそ尋ねてみた」という質問項目を分

[14]なおこの、「地域行事への参加と地域愛との正の相関」という定性的な結果は今回の調査の中で小学４・５・６年生のみならず小学１・２・３年生、中学生、そして高校生のいずれにおいても観察されている。

析することで得られた、高校生の抱く柏崎に対する想いについての、いくつかの興味深い結果を報告する。

5．1 柏崎の高校生は将来「柏崎に住むことになる」と思っているのかどうか

今回、高校生には「大人になったら柏崎に住むことになると思っているか」ということを質問した。具体的には

・「将来あなたは大人になったら柏崎に住む（柏崎に戻ってくる）ことになると思いますか。」（選択肢：「思う」「どちらかといえば思う」「どちらともいえない」「どちらかといえば思わない」「思わない」）

という設問であったが、この設問は高校生に対して「自分は将来的に、生まれ育ちつつある今の柏崎という地に戻ってくるな、柏崎で暮らすことになるな」という、長期的な「人生展望」「人生の設計イメージ」のようなものがあるかどうか、を（さりげなく）問う質問であり、質問をされる側の高校生にとっては「大人になったら柏崎に住みたいですか」という、単に「希望（志望）」を問われる質問と比べ遥かに心理的に重い質問であると筆者は考える。[15]

図 5-1-m ～図 5-3-f までの 6 つの図が、この設問への回答の状況である。それぞれ「祖父または祖母と一緒に暮らしているという高校生」「一緒には暮らしていないが近所に住んでいるという高校生」そして「核家族など祖父母とは一緒には暮らしていない高校生」のグループごと（さらに男女ごと）の結果である。

図 5-1-m 祖父または祖母と同居している、と答えた男子高校生。「柏崎に住むことになる」と思うかどうか

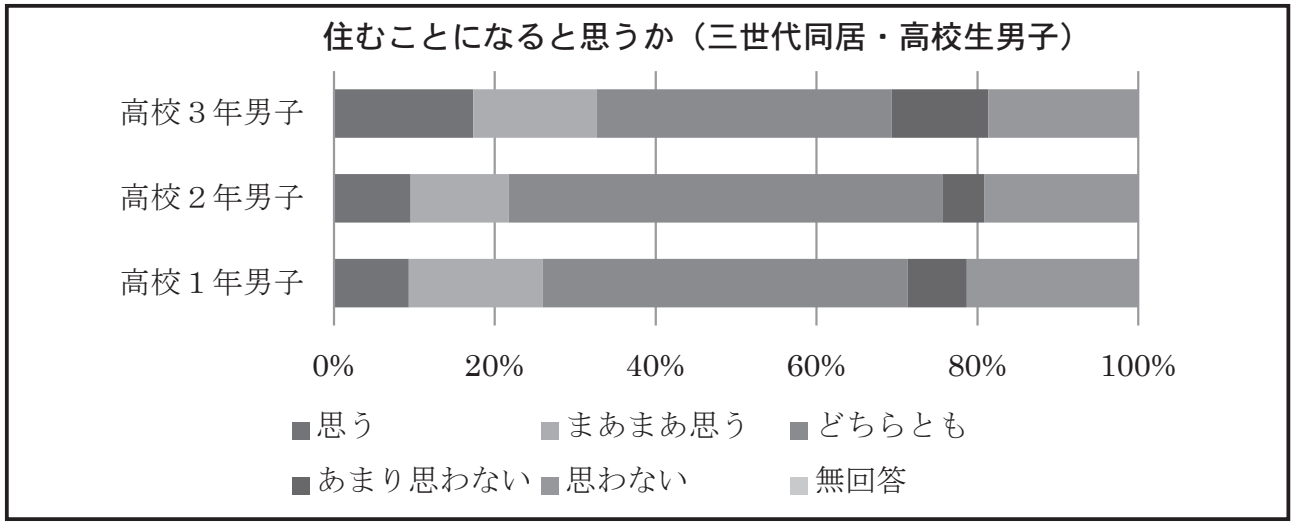
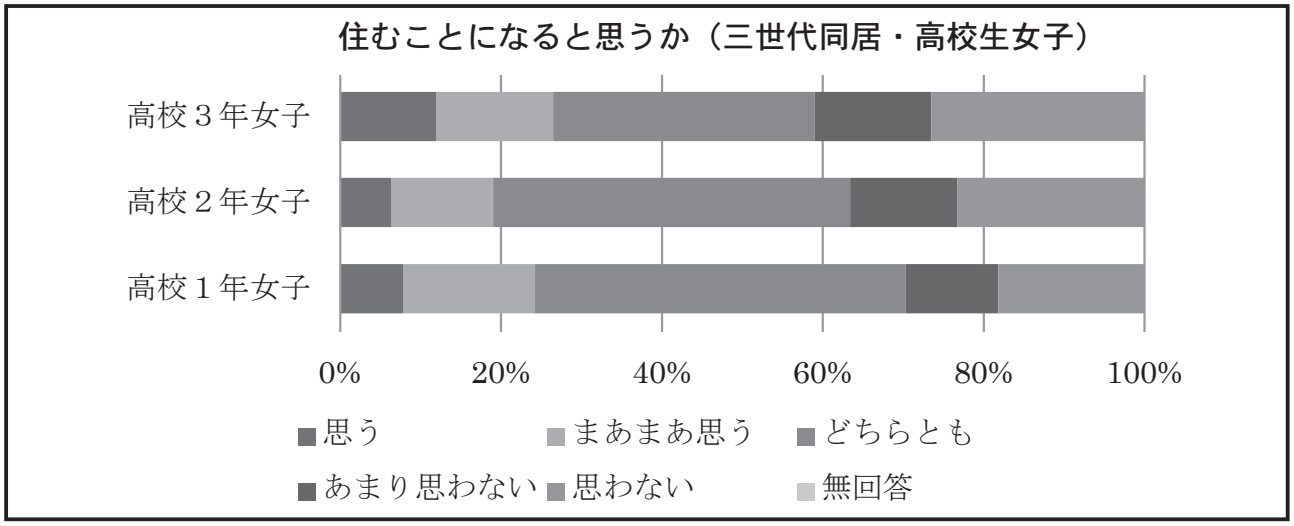


図 5-1- f 祖父または祖母と同居している、と答えた女子高校生。「柏崎に住むことになる」と思うかどうか



[15] 2007 年調査ではこの質問は中学生に対しても発せられたが、今回の 2014 年調査では中学生にはこの質問はしていない。中学生には（意識的であれ無意識的であれ）重すぎるのでは、と筆者としては感じたからである。

図 5-2-m　祖父または祖母と同居はしていないが近くにいると答えた男子高校生

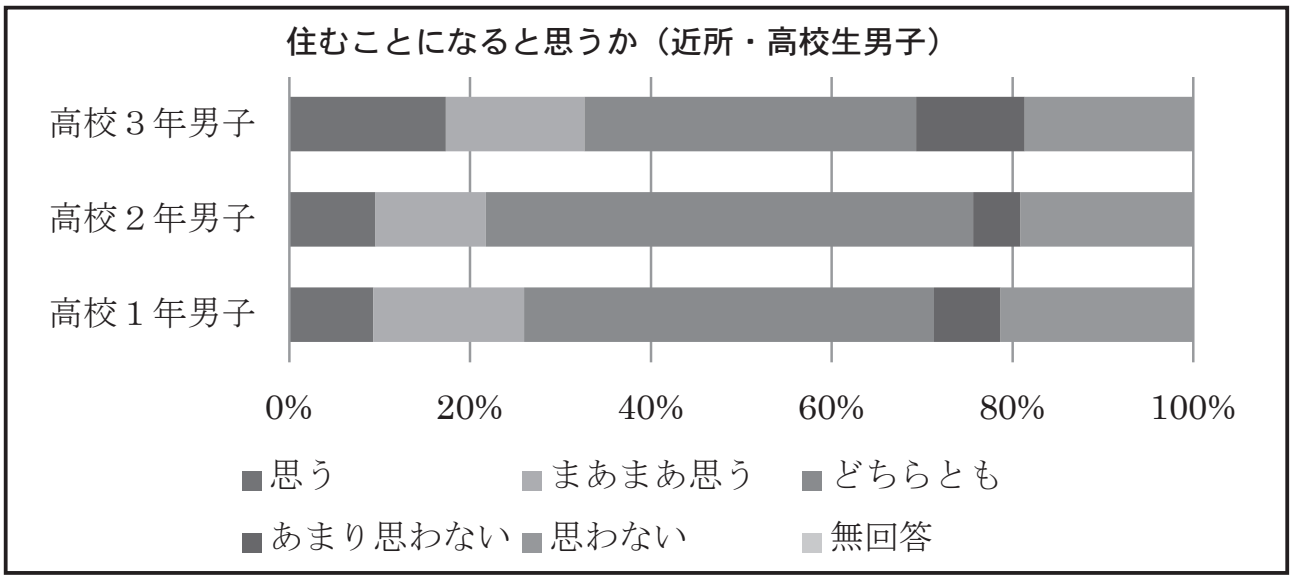


図 5-2-f　祖父または祖母と同居はしていないが近くにいると答えた女子高校生

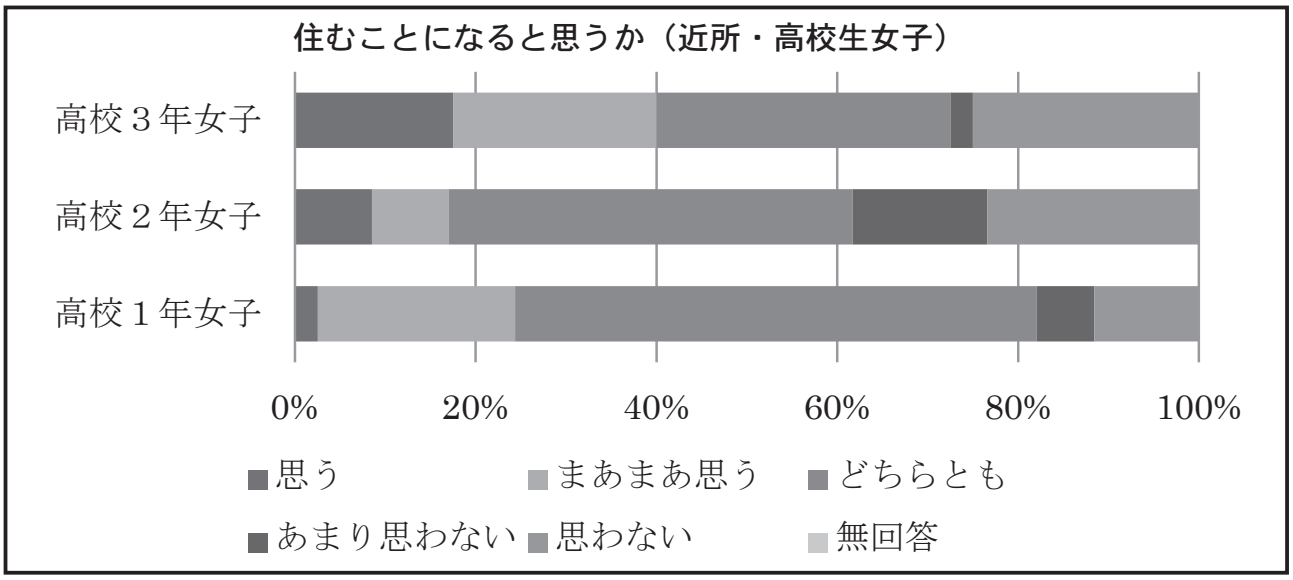


図 5-3-m 「いいえ（祖父または祖母と同居していない）」と答えた男子高校生

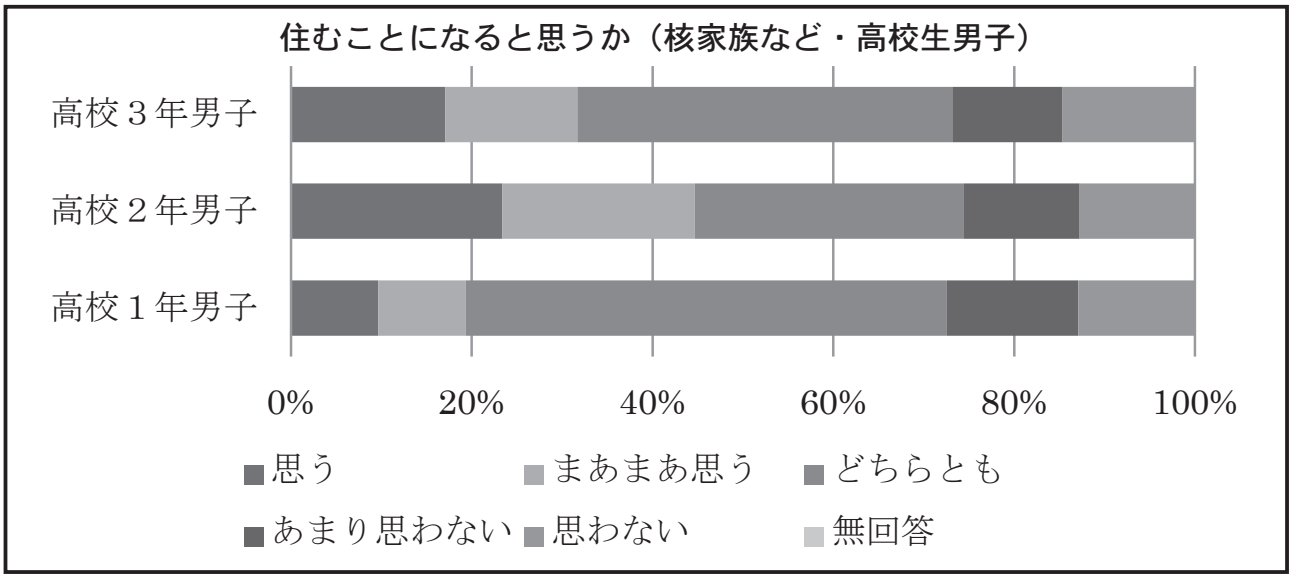
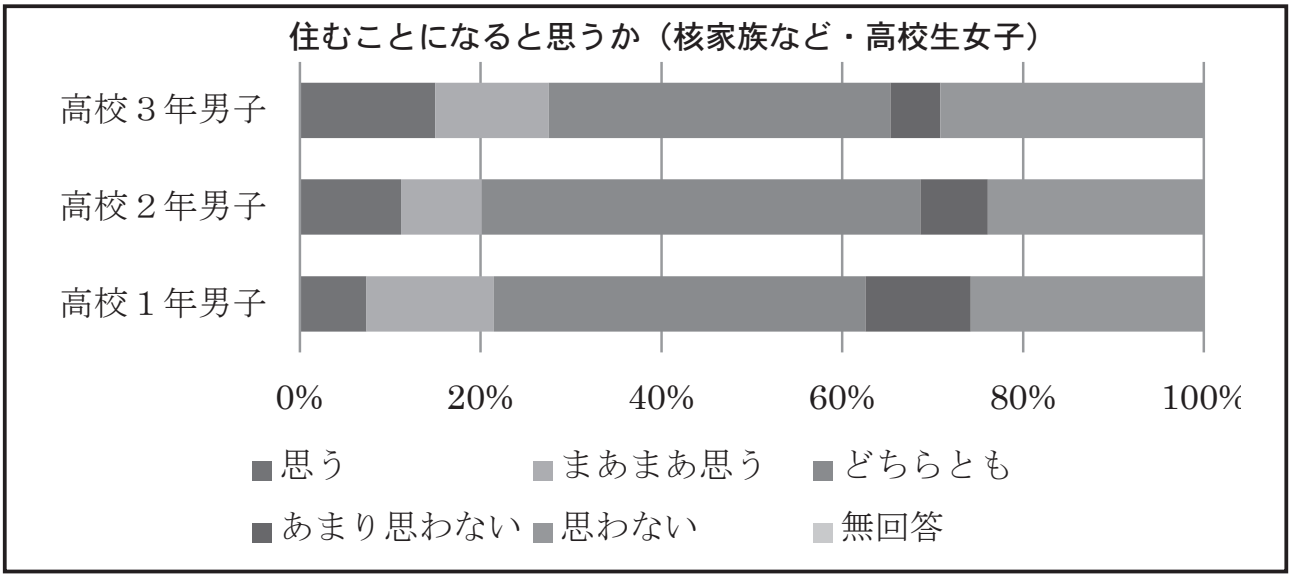


図 5-3-f 「いいえ（祖父または祖母と同居していない）」と答えた女子中高生



これらの図を俯瞰的に見て分かることは、先に見た「柏崎が好きですか」「大人になったら柏崎に住みたいですか」という問いに対する答えの場合と同様、やはり「祖父または祖母と同居している」もしくは「近くに住んでいる」と答えた高校生グループと「いいえ（祖父母とは同居していない）」という高校生グループの間で、あまり差がないということである。とりわけ「祖父または祖母と同居している」もしくは「近くに住んでいる」という高校生のうち「自分は大人になったら柏崎に住むことになる」と「思う」または「どちらかといえば思う」と答えている生徒が２割～４割しかいない、ということは、「祖父や祖母が柏崎の人で、親も本人も柏崎生まれの柏崎育ち」という生徒が多い高校生のグループのうちの２割～４割しか「自分は柏崎に住むことになるだろう、柏崎で暮らすことになるだろう」という「イメージ」や「心づもり」を持ってないということを示しているのであり、将来的に柏崎が「消滅都市」とならないためには危機感（もしくは少なくとも緊張感）を感じるべき事態であろう。

５．２ 親である「柏崎の大人」は「将来子供が柏崎で暮らすこと」を期待しているのだろうか？

ところで５．１で見たような、高校生とりわけ「祖父または祖父と一緒に暮らしている」という高校生の「自分も将来、柏崎で暮らすのだろうな」という意識の強くない状況を踏まえ、次に関心が持たれるのは「では、親の方はどう思っているのだろうか」「親は子供にどう言っているのだろうか」ということであろう。「住みたい度」調査ではその点について、高校生に対し「一緒に暮らしている人」すなわち親などから「将来は柏崎に戻ってきてもらいたい」という期待を寄せられているか（そのような期待を認識しているかどうか）ということを質問している。そこでその結果を見ていくことにする。

次の図 6-1-m から図 6-3-f は

・「一緒に暮らしている人は将来あなたが大人になったら柏崎に住んでほしい（柏崎に戻ってほしい）と願っていますか。」（選択肢：「すごく願っている」「少し願っている」「わからない」「あまり願っていない」「まったく願っていない」「願っているが周囲の意見は関係ない」）

という設問への回答状況である。

図 6-1-m　祖父または祖母と同居している、と答えた男子高校生

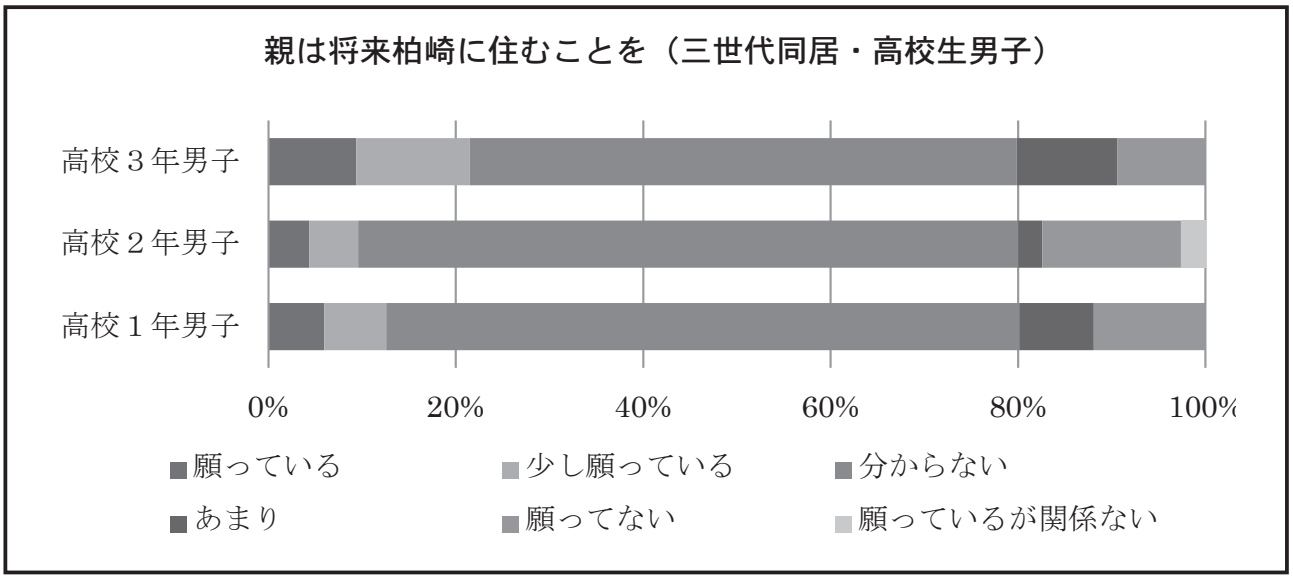


図 6 -1-f　祖父または祖母と同居している、と答えた女子高校生

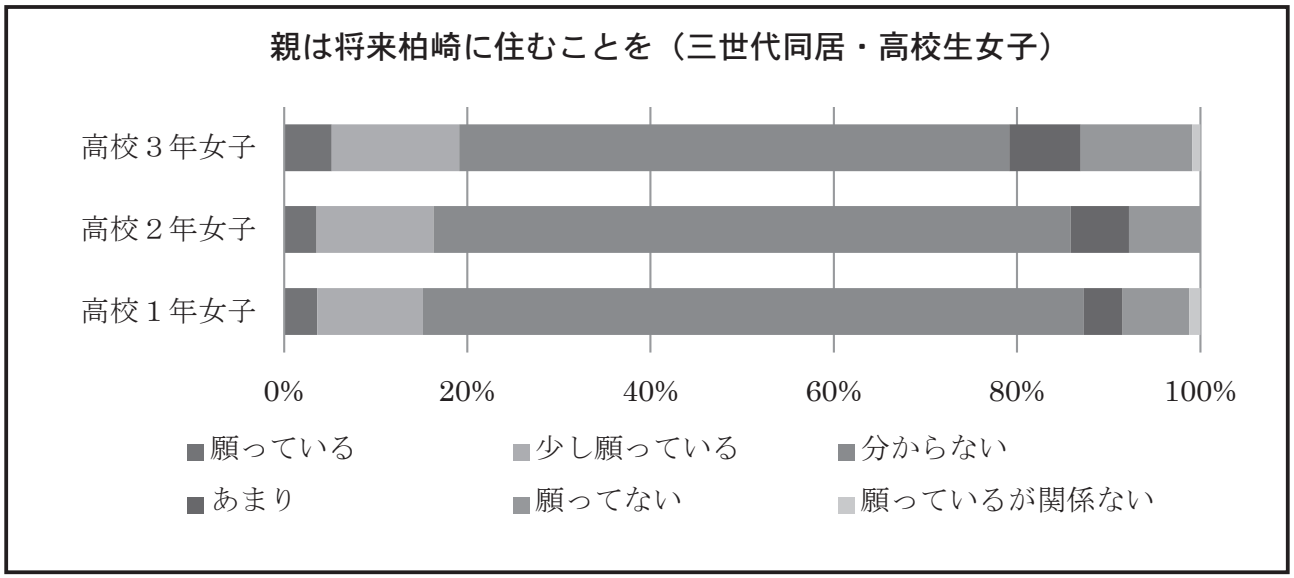


図 6-2-m　祖父または祖母と同居はしていないが近くにいると答えた男子高校生

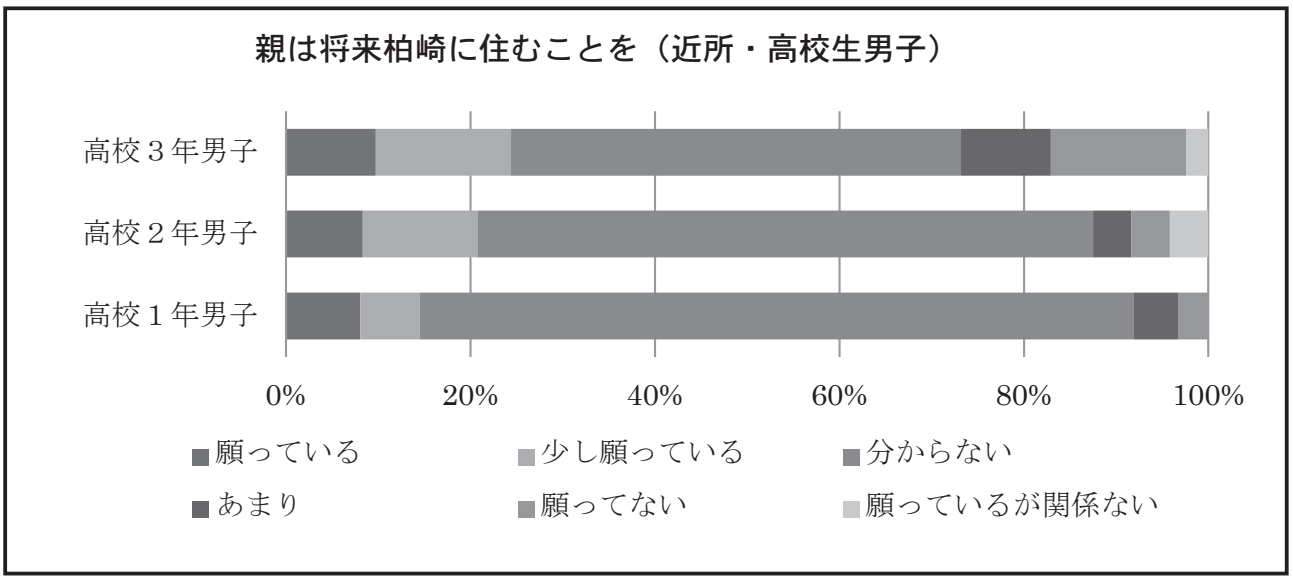


図 6-2-f　祖父または祖母と同居はしていないが近くにいると答えた女子高校生

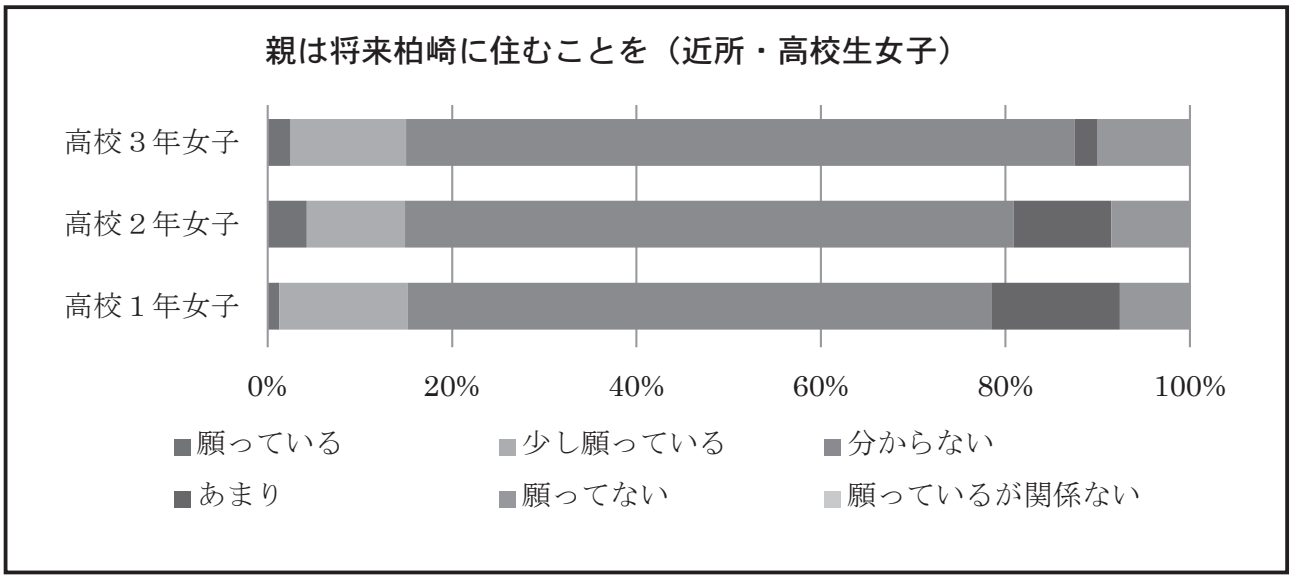


図 6-3-m　「いいえ（祖父または祖母と同居していない）」と答えた男子高校生

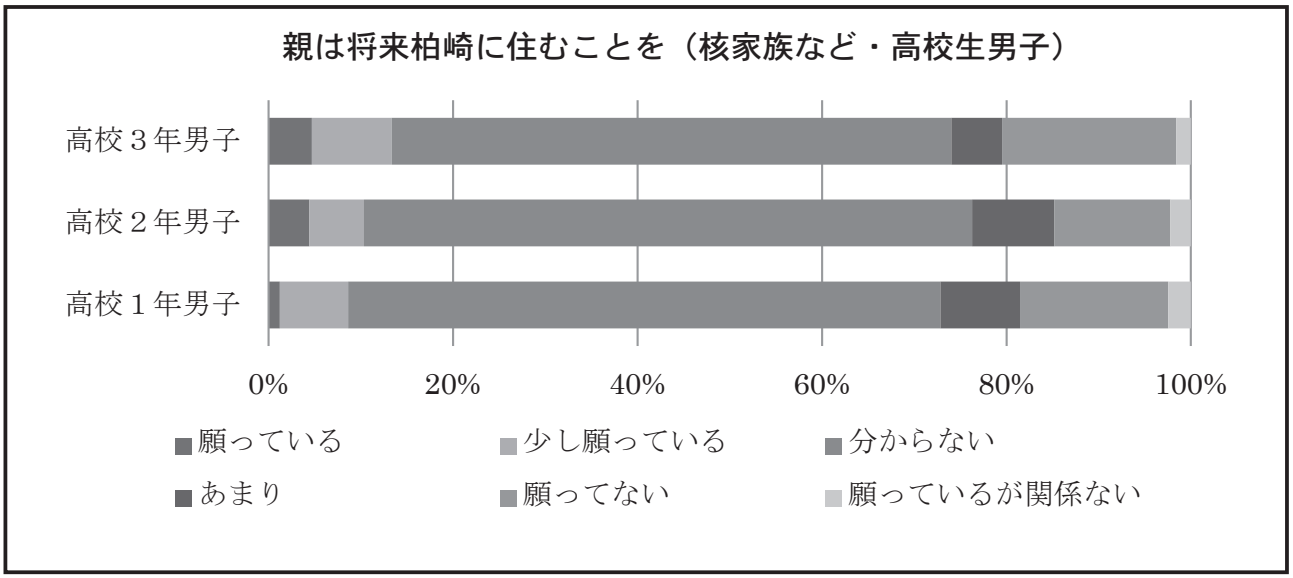
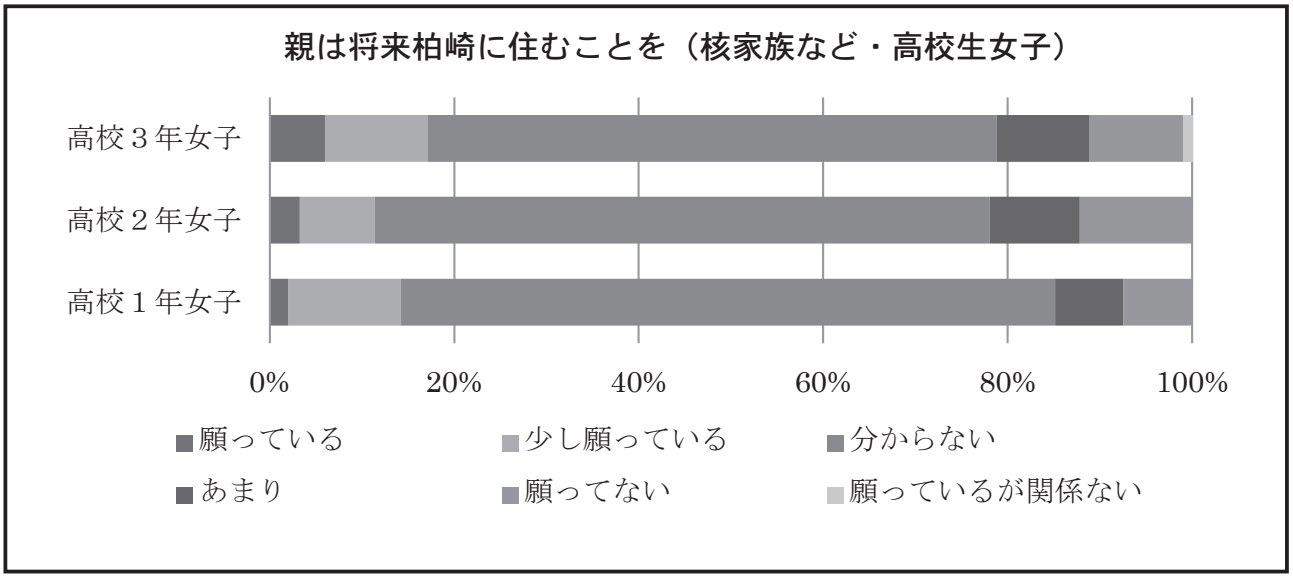


図 6-3-f　「いいえ（祖父または祖母と同居していない）」と答えた女子中高生



これらの図から分かることは「三世帯同居家族」であっても（「核家族」などと大差なく）柏崎の大人の人は子供に「将来柏崎に残って欲しい」もしくは「戻ってきて欲しい」といった期待は（あまり抱いていないか、もしくは）抱いていても子供にはそのようには伝えていない（伝わっていない）ということである。

小まとめ

柏崎の高校生は、祖父または祖母と同居しています、という（おそらくは生粋の柏崎っ子と思われるような高校生であってもその多くは）自分の将来のイメージについて「大人になったら柏崎に住むことになる」というイメージは抱いていない状況にある（５．１節の結果）。一方、高校生に「親はどう思っていると思うか」ということを尋ねたところ、こちらも「分からない」といった答えが多く、子供の立場から言うならば「親は私に、柏崎に戻ってきてもらいたい、みたいな気持ちがあるのかどうか、どうも分からない」という状況であることが分かった（５．２節の結果）。

このように見てくると、親の意向（柏崎に戻ってきてもらいたいという意向）というものが高校生の将来の生活イメージ（将来設計）に対して与える影響というものは大切であることが推測される。以下の５．３節ではそれが、確かに重要である、ということをさらなる詳細な分析結果を添えて示す。

５．３ 親の「柏崎に住んでもらいたい」という期待と高校生の「住むことになる」度

本節では、親や家族など「一緒に暮らしている人」が、高校生である子供に「将来柏崎で暮らしてもらいたい」という期待を伝えているかどうか、ということと、高校生の「自分は将来柏崎にすむことになると思うかどうか」ということの相関関係を調べる。具体的には**「一緒に暮らしている人は将来あなたが大人になったら柏崎に住んでほしい（柏崎に戻ってほしい）と願っていますか。」**という問いに対する反応（**「すごく願っている」「少し願っている」「わからない」「あまり願っていない」「まったく願っていない」「願っているが周囲の意見は関係ない」**のいずれか）ごとに生徒を分け、そうして分けられた生徒群ごとに、**「将来あなたは大人になったら柏崎に住む（柏崎に戻ってくる）ことになると思いますか。」**という問いに対する回答状況（**選択肢：「思う」「どちらかといえば思う」「どちらともいえない」「どちらかといえば思わない」「思わない」**）を調べる。そこで得られた結果が以下の図 7-1-m から図 7-3-f までの各図である。

図 7-1-m　祖父または祖母と同居している、と答えた男子高校生

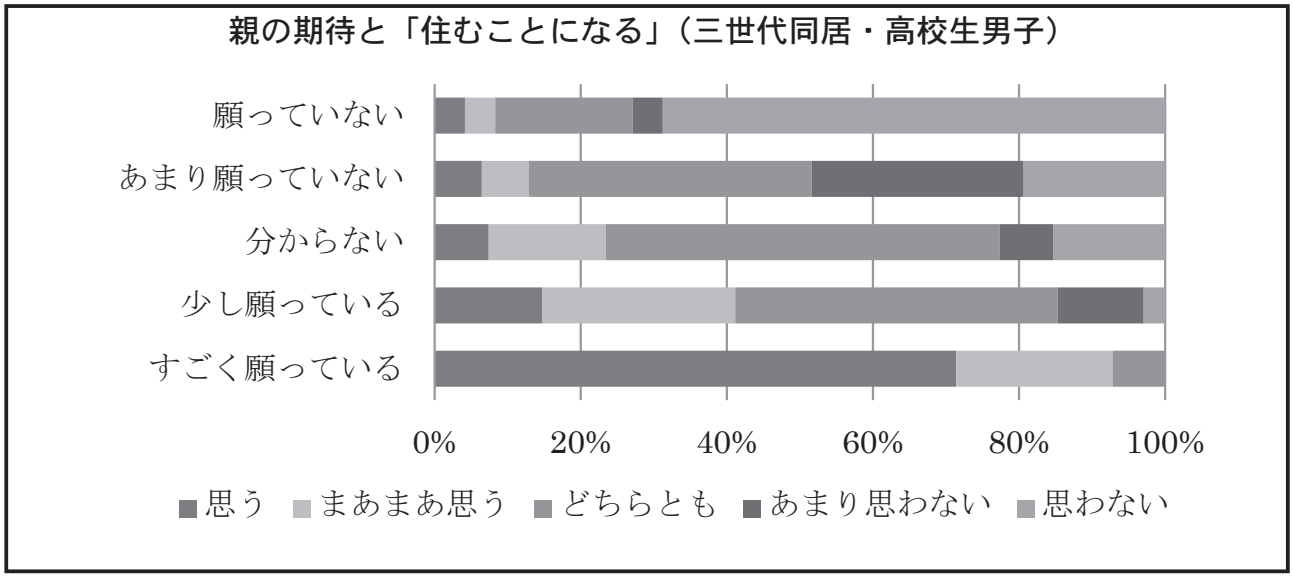


図 7-1-f　祖父または祖母と同居している、と答えた女子高校生

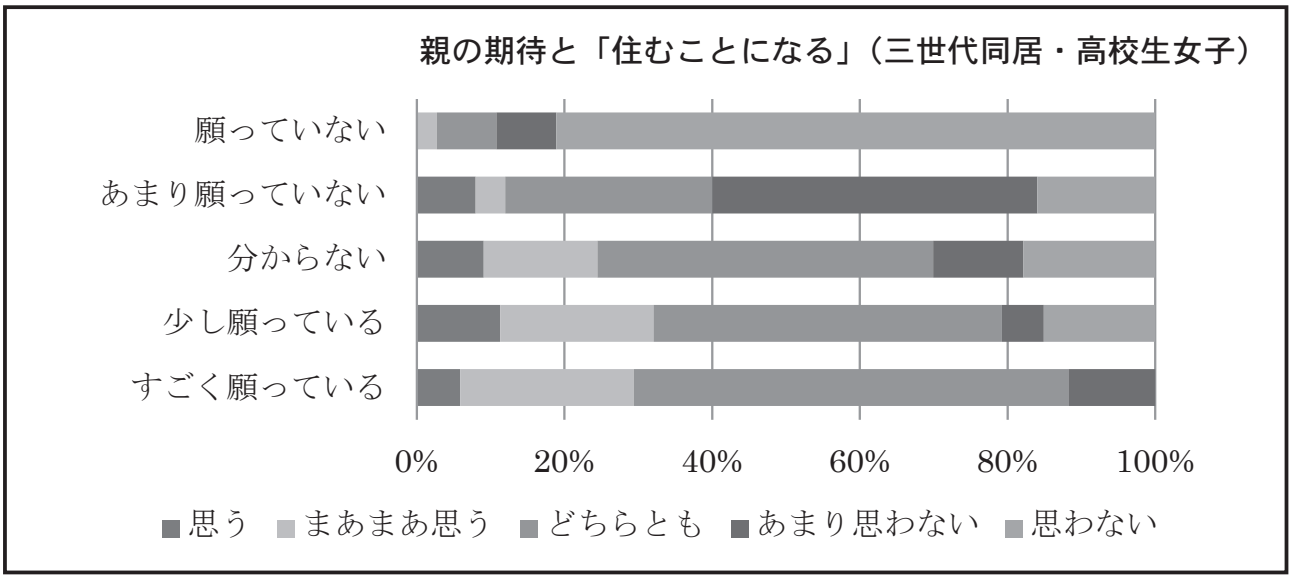


図 7-2-m 祖父または祖母と同居はしていないが近くにいると答えた男子高校生

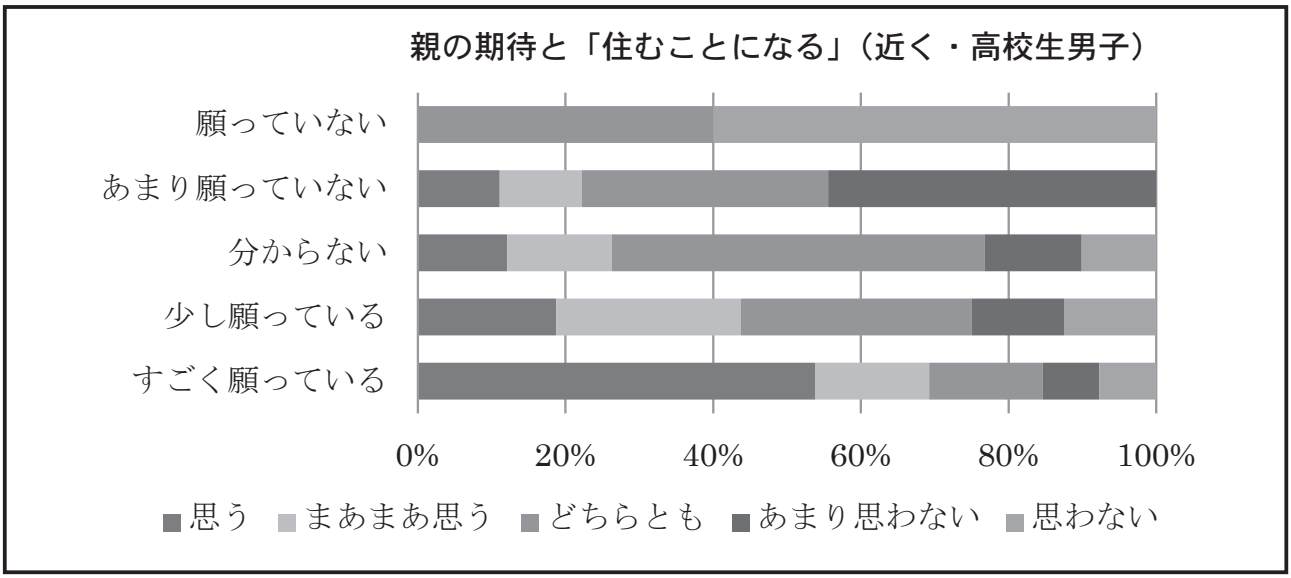


図 7-2-f　祖父または祖母と同居はしていないが近くにいると答えた女子高校生

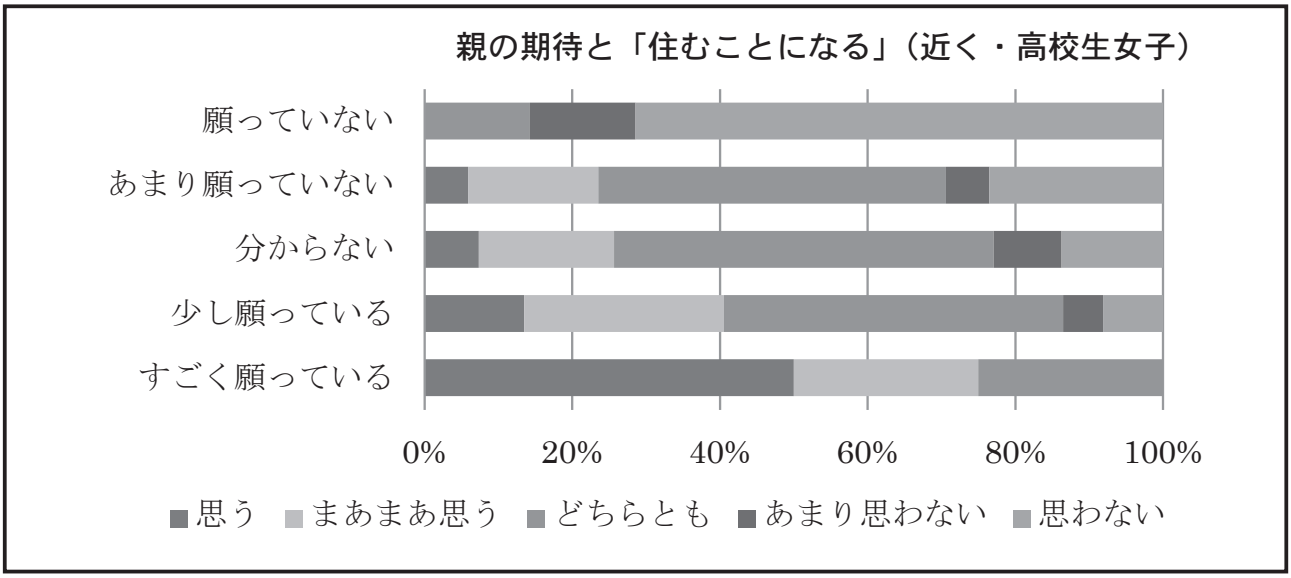


図 7-3-m　「いいえ（祖父または祖母と同居していない）」と答えた男子高校生

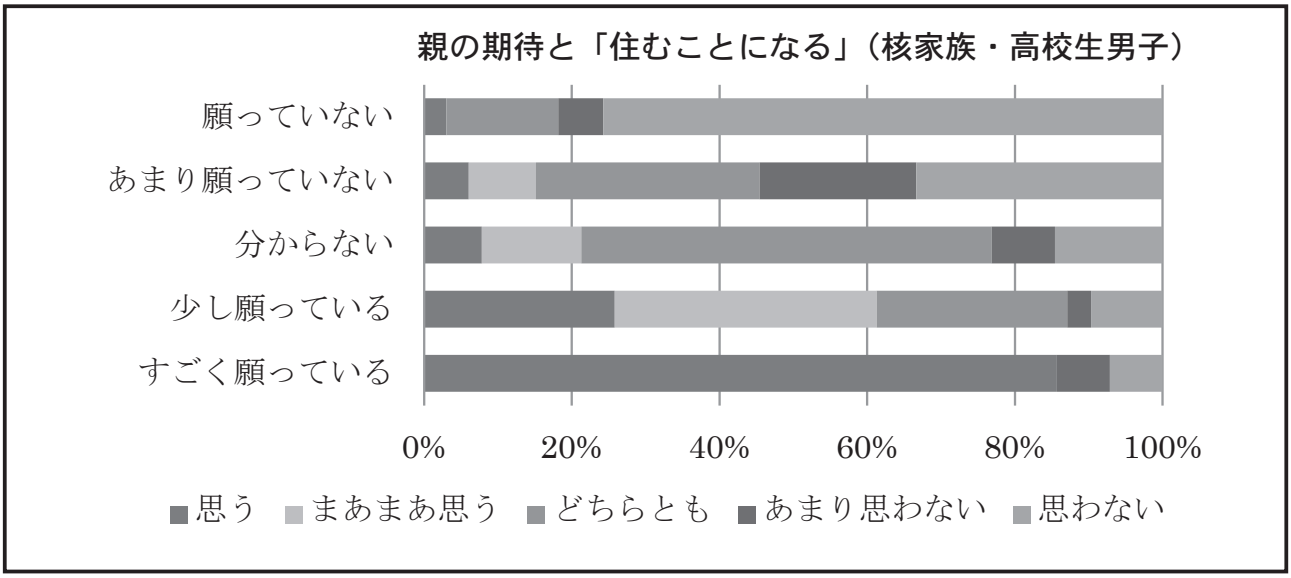
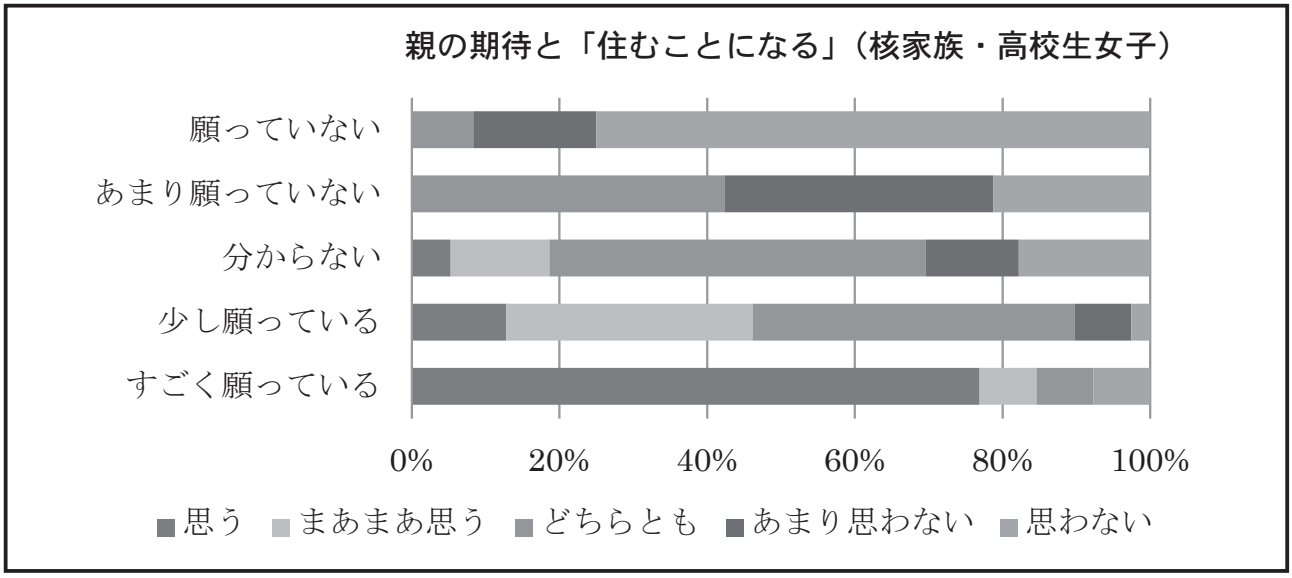


図 7-3-f　「いいえ（祖父または祖母と同居していない）」と答えた女子中高生



これらの図で着目するべきポイントは、各図の中、上から５番目の親が「すごく願っている」というグループと３番目の「(親がどのように願っているのか)分からない」というグループにおける「柏崎に住むことになると思う」と答える生徒の割合の違いである。[16] すなわち例えば同じ「祖父または祖母と同居している」という高校生であっても、親や周囲の人が「子供には将来、柏崎で暮らしてもらいたい」という期待が伝わっているグループ（５番目の「すごく願っている」というグループ）と、そのような期待が伝わっていないグループ（３番目の「分からない」というグループ）とでは「自分が大人になったら柏崎に住むことになるだろう」という気持ちが大きく異なっており前者の方が圧倒的にそのような気持ちは強いのである。これはもちろん

・因果関係（親が強く願っているから、子供も「柏崎に住むことになるだろうな」という意識を強く持っている）

であるのか、それとも

[16] 柏崎市外から柏崎市内に通っている高校生は、「周囲の人は将来あなたが柏崎に住むことを願っていますか」と聴かれたならば、大半が「あまり願っていない」もしくは「まったく願っていない」という選択肢を選ぶであろうことは容易に想像がつく。そのため同じ質問に対して「分からない」という選択肢を選んでいる高校生は、その大半は「柏崎市内で暮らしている高校生」であると考えることが自然であろう。したがってここでの「分からない」という選択肢を選んでいる高校生というのは「柏崎に住んでいるけれども、親は自分が将来柏崎に住んで、柏崎で暮らしてもらいたいと思っているのかどうか分からない」という高校生たちであると考えるべきである。

・単なる相関関係（例えば親が子に継がせる家業がある場合にはそのことを子供に伝え、子供もそのように思っている（家業を継いで柏崎で暮らすことになると思っている）が、継がせる家業など特にない親は「柏崎で、親の近くで暮らしてもらいたい」とは言わないため子供も「将来は柏崎で親の近くで生計を立てよう・暮らそう」と思っていない、というのが真相であるが、そのような真相は表には出てこず、そのため一見すると「親が強く願っている」場合に高校生は「将来柏崎で暮らすことになる」という気持ちを強く持っているように見えている）

のかは、分からない（区別を付けることができない）。因果関係であるならば「親の期待」をしっかりと子供に伝えることは子供の将来的な柏崎への居住意欲を高めるため推奨される、ということになるが相関関係ではそのような期待を子供に伝えることは、仮に推奨され、実際にそのように子供に伝える家庭が増えたとしても（子供の将来的な柏崎への居住意欲を高める）効果があるかどうかは分からないということになる。

しかし仮に後者であったとしても図７-1- mで示したグラフの「元になった人数表」である下表を見ると、親が子供に「将来柏崎に住んでもらいたい」という期待を（もしあるのであるならば）少しでも伝えることには意味があることが分かる。というのは、下表を見るならば、親の「将来柏崎に住んでほしい」という期待について、親が「すごく願っている」という生徒は合計 28 人で、そのうち 20 人が「柏崎にすむことになる」と思っているのに対して親がそのような期待を抱いているかどうか分からない生徒は合計 270 人で、そのうち自分が柏崎に住むことになるとは「あまり思わない」が 20 人、「思わない」が 41 人である。すなわち親の期待が不明な生徒は多く、そのような家庭の中から 20 人プラス 41 人の合計 61 人の「柏崎で祖父または祖母と暮らしている男子高校生」が柏崎から離れていくマインドに傾いているのに対して、親が「少し願っている」というだけで、そのような生徒合計 34 人のうち柏崎に住むことになると「あまり思わない」は 4 人、「思わない」は 1 人と一気にその割合が減る。このように同じ「柏崎で祖父または祖母と暮らしている男子高校生」であっても「親は自分が柏崎に住むことを期待しているのかどうか分からない」から「少し願っている」と変わるだけでも「柏崎から離れていくマインドに傾いている子供の割合」は大きく下がっているのであり、かつそのような「親が期待しているかどうか分からない」そしてそのためもあってか「柏崎から離れるマインドに傾いてしまっている」という高校生は絶対数が多い（61 人もいる）のである。したがって、親が子供に対して、もし「将来は柏崎で暮らしてもらいたい」という期待を抱いているとするならば、そのような期待をある程度伝えることは、若い柏崎育ちの子供の意識（大人になった時の生活イメージ）を「柏崎で暮らす」方向に向け、そして将来の柏崎の人口減少という事態を軽減または回避・解消しようとする上で重要であると考えられる。[17]

	思う	まあまあ思う	どちらとも	あまり思わない	思わない	無回答	合計
すごく願っている	２０	6	2	0	0	0	２８
少し願っている	5	9	１５	4	1	0	３４
分からない	２０	４３	１４５	２０	４１	4	２７０
あまり願っていない	2	2	１２	9	6	0	３１
願っていない	2	2	9	2	３３	1	４９

[17] 柏崎市の会田洋市長は柏崎市の広報誌の中の「市長随想」というコーナーで今回の 2014 年「柏崎住みたい度調査」の結果に基づいた発言として「家族が地元に住んでほしいと思っている場合は、子供も地元に住みたいと思う傾向があり、そうでない場合は逆の結果となっています。若者の人口流出にはさまざまな要因がありますが、家族の意向も大きく影響しているのではないでしょうか」と述べている（広報誌の名称や当該号の号数は参考文献欄を参照）。これは柏崎市民、すなわち柏崎の大人には、子供に「将来柏崎に住んでもらいたい」という期待はあるはずであり、そうであるならばそのような期待は黙っていてはダメで、子供にある程度しっかり伝えることが重要である、ということを柏崎市民に対して呼びかけたものであろう。柏崎で現在子育てをしている世代を中心に、耳を傾け心に留め、実践を心がけたい呼びかけであると著者は考えている。

なお最後に、「親の期待」と「大人になったら柏崎に住みたいですか」という「柏崎に住みたい、柏崎で暮らしたい」という積極的な意思との間の関係を調べた。ここでは紙面の都合で「祖父または祖母と同居していると答えた高校生の場合」の結果のみ図 8-m と図 8-f として示すが、それを見るとやはり親からの「柏崎に住んでもらいたいという期待」と「大人になったら柏崎に住みたい、柏崎で暮らしたい」という積極的な意思との間にも図 7-1- mや図 7-1-f と同様、明らかな正の相関関係が見られる。すなわち「親や周囲の期待」というものを自覚している高校生は「柏崎に住むことになる」という意識（あるいは覚悟ともいうべき感情）のみならず、より積極的な「住みたい」という気持ちも強く持つ傾向が強いということが分かる。したがって親の、子に対する「将来大人になったら柏崎に住んでもらいたい（柏崎に戻ってきてもらいたい）」という期待は、親にそのような期待があるならば高校生にもなったような子供たちにはある程度しっかりと伝えておくことが重要である、ということが本調査からの「柏崎の親」ならびに「柏崎地域」への進言である。

図 8-m　祖父または祖母と同居している、と答えた男子高校生

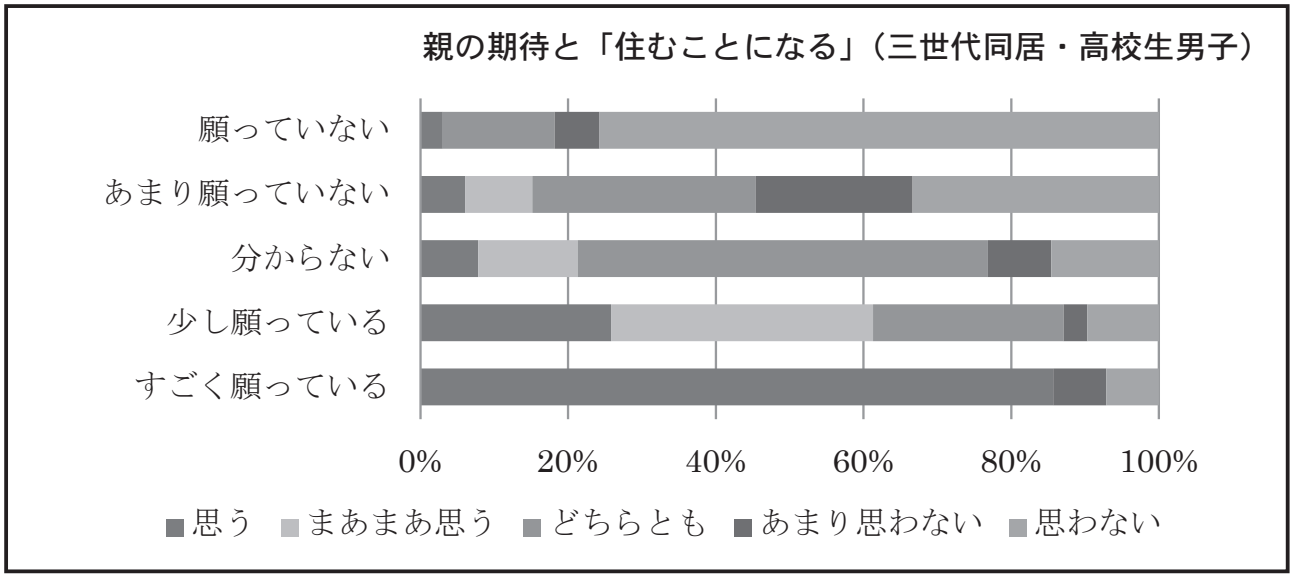
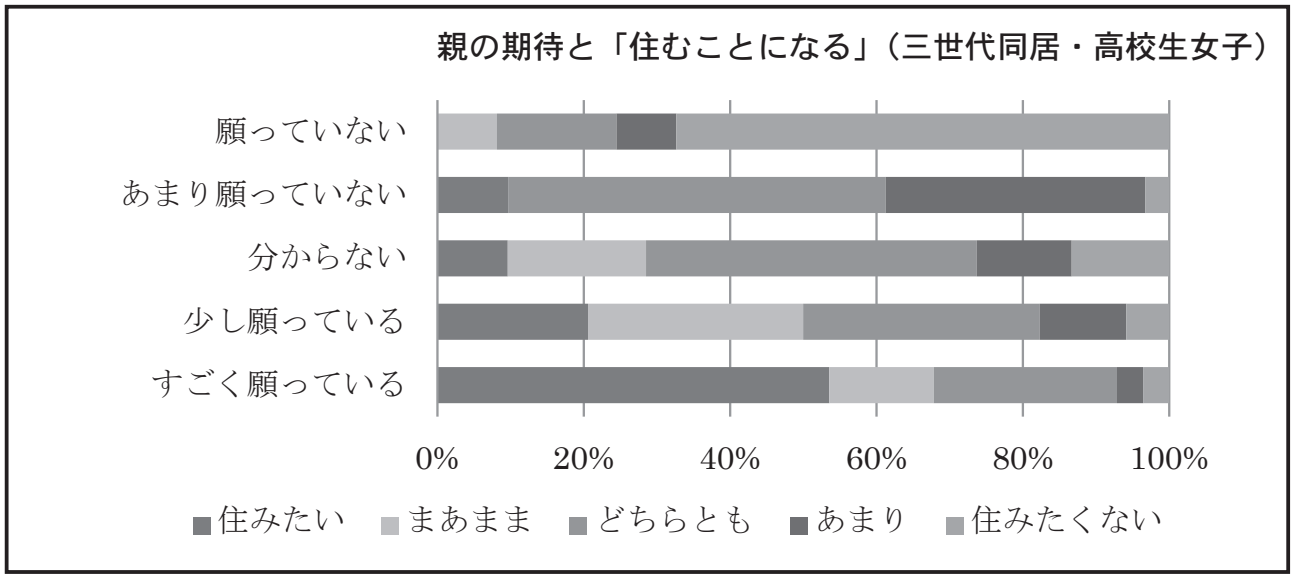


図 8-f　祖父または祖母と同居している、と答えた女子高校生



６．結びにかえて

本稿は 2014 年度に実施された「かしわざき住みたい度」調査のデータを「祖父または祖母の方は一緒に住んでいますか。」（選択肢:「はい」「いいえ」「一緒に住んでいないが近所に住んでいる」）という質問に注目をし、この問いに対しどの選択肢を選択しているかでアンケートに答えた児童・生徒をグループ分けし集計を行う「クロス集計分析」を行った。そこで得られた結果は、これまでの 2 節から 5 節までの各節で述べてきたとおりであり、個々の結果はここでは再述はしないけれどもそれらを総じて述べるならば「祖父または祖母と一緒に暮らしており、祖父母の代から柏崎で暮らしていると思われる世帯」の子供が、そうでないタイプの世帯の子供と同じぐらい、将来大人になった時に柏崎で暮らすイメージや将来像を抱いていないというものであった。そのような結果は柏崎にとっては憂慮されるべき事態であろう。[18]

ではどうすれば柏崎で育ちつつある「柏崎の子供たち」に故郷であるはずの柏崎に対する愛着の気持ち、柏崎を愛し末長く柏崎に暮らしたいという気持ちを育むことができるのであろうか。 それには、例えばどのような具体的経験（例えば「米山登山をした」「青海川でサケの稚魚の放流をした」など）をしたことがある児童･生徒が「柏崎愛」を強く抱いているか、といったことを調べ、「柏崎愛」と相関が高く、その涵養をうながすような経験や活動を具体的に突き止めてそれを学校教育の中で一層積極的に取り入れ実施する、といったことが一つの手段として有効になってくるかも知れない。[19]

あるいは今回のアンケートではいわゆるスマートフォンの普及状況や利用状況などについて一切質問をしていない。しかしスマートフォンの普及により日本中どこにいても（すなわち柏崎に住んでいても）いわゆる都会や大都市に住んでいる場合とほぼ同じ情報が個々の人の手に入るようになった。そのことが「もっと都会に住みたい」といった「柏崎を離れようとする気持ち」に対してどのような影響を与えているか（緩和しているか）ということを調べることも有益であるかも知れない。

また、そのようなことを探るべく行う意識調査というものは必ずしも「全数調査」である必要は無い。筆者としては今後、上に述べたような、これまでの「住みたい度」調査よりもさらに一層子供たちの実態と心に迫る調査が、比較的小規模な「サンプル調査」として高い頻度で実施されるならば､そのような調査はこれまでの「住みたい度調査」と同じぐらい、または更に有益な調査になるであろうことを感じているところである。

参考文献

会田洋柏崎市長 (2015)「市長雑感」柏崎市役所発行「広報かしわざき」2015 年 11 月 5 日号

増田寛也 (2014)「地方消滅－東京一極集中が招く人口急減」中央公論新社刊.

江口潜（2015)”2014 年度「かしわざき住みたい度調査」実施報告書”（柏崎市企画政策課に提出したもの）「柏崎市企画政策課」

山崎一輝・江口潜・山本康太 (2009a)“若者かしわざき住みたい度調査研究報告書（その１）”新潟産業大学経済学部紀要第 36 号 , pp. 35-122.

山崎一輝・江口潜・山本康太 (2009b)“若者かしわざき住みたい度調査研究報告書（その２）”新潟産業大学経済学部紀要第 37 号 , pp. 95-149.

[18]そのような「郷土愛」すなわち「柏崎愛」を育むことは、人口減少を食い止めるための直接的な政策手段とはならないものの、人口減少を未然に防止しようとするうえでの一つの「基盤」を整備することであり重要な課題である。

[19]例えば前新潟県知事の平山征夫氏（新潟国際情報大学学長）は柏崎市主催「まちづくり市民フォーラム」（2015 年 8 月 5 日柏崎市産業文化会館）でのパネルディスカッションの席上、知事時代に地域の子供の地域愛を涵養することを目的に、学校教育の中で小学生以上の児童生徒に毎年１本ずつ植樹をしてもらう（すると新潟県で育った子供は小学１年から高校３年まで最多で 12 本の「自分が植えた樹」が新潟県内に残り､その子が大人になって新潟を離れたとしても木は新潟に残り大きくなり続ける）ということを実施したいと思っていた、と明かした。このような「それを行うことで子供たちの故郷を愛する気持ちが育つ」と考えられるものを発案したり発見したりして実行に移していこうとすることに著者も賛成の意を感じた次第である。

付録１．アンケートの内容（設問と選択肢）

この付録１では今回の「かしわざき住みたい度」調査の高校生対象のアンケート票の設問と選択肢を表Ａ１として一覧表にして示す。各設問のうち、「小中学生および高校生の中の一部に対してのみ質問した問い」については備考欄に、その問いがなされた対象を記してある。

表Ａ１ アンケートの設問と選択肢（高校生対象のアンケート票の場合）

設問	選択肢	備考
（1）あなたの性別を教えてください。	1男　　2女	
（2）あなたの学年を教えてください。		
（3）祖父または祖母の方は一緒に住んでいますか。	1はい　2いいえ　3一緒に住んでいないが近所に住んでいる	
（4）あなたは学校から帰宅した後、学校であったことや習ったことなどについて家の人に話しをしていますか。	1よく話している　2ときどき話している 3あまり話さない	
（5）あなたの趣味は何ですか。３つまで選んでください。	1スポーツ　2読書　3まんが・アニメ 4アウトドア5旅行　6音楽・映画 7洋服・おしゃれ　8料理 9ゲーム・インターネット　１０その他（　　）	
（6）あなたが住んでいる地域で行われる行事（お祭り、運動会、クリーンデーなど）に、あなたも参加していますか。	1参加している　2たまに参加している 3参加していない	
（7）あなたは冬が好きですか。	1好き　2どちらかといえば好き 3どちらともいえない　4どちらかといえば嫌い 5嫌い	
（8）あなたは都会生活と田舎生活のどちらに魅力やあこがれを感じますか。	1都会生活　2田舎生活 3どちらともいえない	
（9）あなたは柏崎が好きですか。	1好き　2どちらかといえば好き　3どちらともいえない　4どちらかといえば嫌い　5嫌い	
（１０）あなたは柏崎のどんなところが良いと思いますか。柏崎の「良いところ」や「好きなところ」を３つまで選んでください。	1海や山などの自然が豊か2住んでいる人が親切 3公園などの遊び場がたくさんある 4スポーツ施設がたくさんある 5博物館や図書館などの文化施設がある 6えんま市やぎおん祭りなど、祭りや行事が多い 7バスや電車の便がよい　8買い物が便利 9病院や福祉施設が充実している 10治安がよい 11その他（　　）	
（１１）反対に、あなたは柏崎について「ここは良くない」「ここは好きではない」と思う点がありますか。次の中から３つまで選んでください。	1海や山が汚れている2地域の付き合いが少ない 3若者が楽しめる施設が少ない 4スポーツ施設が少ない　5博物館や図書館などの文化施設が少ない　6祭りや行事が少ない 7バスや電車の便が悪い　8買い物が不便 9病院や福祉施設が充実していない	小学校高学年以上に質問
（１２）あなたは高校を卒業したら、引き続き柏崎に住み続けたいですか。	1そうである2どちらかといえばそうである 3どちらともいえない 4どちらかといえばそうでない 5そうでない	

（１３）上記（１２）の質問で「４どちらかといえばそうでない」「５そうでない」と答えた人におたずねします。そのように思う理由としてあてはまるものを、次の中から選んでください（いくつでも）。	１望む進学先や就職先が柏崎にはないから ２買い物ができるお店が柏崎には少ないから ３遊べるお店が柏崎には少ないから ４電車やバスの本数が柏崎には少ないから ５他のまちで暮らしてみたいから ６他のまちに親しい友達などがいるから ７親もとを離れ「一人暮らし」をしてみたいから ８その他（　　）	小学校高学年以上に質問
（１４）以下の問いは再び全てのみなさんにおたずねします。一緒に暮らしている人は、将来あなたが大人になったら柏崎に住んでほしい（柏崎に戻ってほしい）と願っていますか。	１すごく願っている　２少し願っている ３わからない　４あまり願っていない ５まったく願っていない ６願っているが周囲の意見は関係ない	高校生のみ質問
（１５）将来あなたは大人になったら柏崎に住む（柏崎に戻ってくる）ことになると思いますか。	１思う　２どちらかといえば思う ３どちらともいえない ４どちらかといえば思わない　５思わない	
（１６）住むか住まないかは別として、将来あなたは大人になったら柏崎に住みたい（柏崎に戻って来たい）と思いますか。	１思う　２どちらかといえば思う ３どちらともいえない ４どちらかといえば思わない　５思わない	
（１７）あなたが「心地よく快適に暮らせるまち」と思うのはどのようなまちですか。次の中から「こんなまちだったら心地よく快適に暮らせるだろうな」と思うものを３つまで選んでください。	１山や海が多いまち　２静かに暮らせるまち ３道路が広いまち ４買い物をするお店が多いまち ５公園や広場が多いまち ６電車やバスが使いやすいまち ７危険な事件が起きないまち ８地震などの災害にたえられるまち ９遊ぶお店が多いまち １０経済が盛んで活気があるまち １１にぎやかなまち １２スポーツ施設が充実したまち １３暮らしにお金がかからないまち １４バリアフリーが浸透しているまち １５その他（　　）	小学校高学年以上に質問
（１８）あなたにとって今、柏崎は「心地よく快適に暮らせるまち」と思いますか。	１思う　２どちらかといえば思う ３どちらともいえない ４どちらかといえば思わない　５思わない	小学校高学年以上に質問
（１９）５年～１０年ぐらい先の将来、柏崎市はどうなっていると思いますか。思い浮かぶ内容を３つまで次の四角の中に書いて教えて下さい。	(自由記述回答)	
（２０）あなたがこれからの柏崎の「まちづくり」をすすめるとしたら、どんな政策を行いたいですか。次の中から一番やりたい事柄を選んでください。	１工場を増やす　２地震などの災害に強くする ３まちをきれいにする ４子どもを育てやすくする ５お年寄りが住みやすくする ６公園を増やす　７学校の勉強を楽しくする ８スポーツ施設を増やす ９買い物ができるお店を多くする １０電車やバスの本数を増やす １１その他（　　）	中学生以上に質問

（２１）あなたはこれからの柏崎がどのようになっていけばよいと思いますか。３つまで選んで下さい。	１服屋さんが増える　２遊べるお店が増える ３何でも売っている大型店が増える ４遊園地ができる ５食事ができるお店が増える ６電車やバスの本数が増える ７木や花が増える　８働く場が多くなる ９地震などの災害に強くなる 10 静かに住めるようになる 11 図書館や博物館が増える 12 商店街が盛り上がる 13 子どもを育てやすいまちになる 14 病院が増える 15 お年寄りが住みやすいまちになる 16 地域の人たちが仲良くなる 17 農業をする人が増える 18 漁業をする人が増える 19 柏崎に旅行しに来る人が増える 20 スポーツ施設が増える　21 その他（　　）	小学校高学年以上に質問

付録２：アンケートの実施状況と回収部数など

今回のアンケートの実施状況などを次の表Ａ２にまとめてある。

表Ａ２：柏崎「住みたい度」調査実施状況

	ご協力頂いた学校	実施状況	回収された調査票の数
小学校	市内の全ての小学校	全学年・全生徒を対象に実施	低学年 1997 人分、高学年 2117 人分、合計 4114 人分回収（市内小学生の 95％以上）
中学校	市内の全ての中学校 （柏崎翔洋中等教育学校を含む）	全学年・全生徒を対象に実施	2175 人分回収（市内中学生の 95％以上）
高等学校	市内の全ての高校 （柏崎翔洋中等教育学校を含む）	柏崎高校は１年生のみ、柏崎翔洋中等教育学校は４年次と５年次（高校１・２年生）のみ実施。それ以外の高校では全学年で実施（一部、事情により不実施のクラスあり）	2010 人分回収
大学	新潟産業大学 新潟工科大学	ゼミナール等での実施を依頼	458 人分回収（２つの大学の、いずれもおよそ 50％以上の学生より回答を得た）。
社会人			9 人のみ実施

Do you like Kashiwazaki？: Young people's willingness to live in and send their lives in Kashiwazaki-region

Sen EGUCHI

2016年2月

新潟産業大学経済学部紀要　第46号別刷

BULLETIN OF NIIGATA SANGYO UNIVERSITY
FACULTY OF ECONOMICS

No.46 February 2016